

測り知ることができない。保存の力のない者があつたら、私が多年の辛勞も水泡に歸してしまふわけだ。むしろ公の文庫に納めて、私同様貧困の者に貸し與へて讀ませる方が、後進の一助ともなつて、私の意志に適つてゐるのだ」と答へた。

崋山は、何人に對しても常に赤誠を以てした。だから彼の言ふ言葉には何時でも眞情が溢れてゐた。初対面の時には威壓を受けるけれども、時が経つ程腹の底からの親しみが湧いて來て、全く惹き付けられてしまふのであつた。

高野長英

高野長英は、蘭學の蘊蓄天下第一と自負し、一代の先覺者を以て自ら任じてゐたが、性狷介、行ひ奇矯にして、少壯氣鋭容易に人に下らなかつた。長英は文化元年の生れで、崋山に比べると十一年下だつた。剛腹無類、爛々たる眼識を以て常に人を見下してゐた崋山のやうな其の高野長英ですらも、崋山に對しては眞の弟のやうな態度で悦服してゐた。或時長英は崋山を評して、

「余は生れて三十六歳、幾百千人に交つたが、未だ崋山程の大人物を見たことはない」と言つた。

崋山は人と交るのに決して塙壁を設けなかつた。訪ねて來る者があれば何人でも慇懃に迎へて、胸襟を披いて談笑した。だから彼の處へは、武人文客は勿論のこと、神官僧侶、百姓町人、其の他あらゆる階級の者が訪ねて行くので、門前常に市をなしてゐたけれども、彼は少しも倦怠の色なく親切に應接

懇談した。

彼はいつでも貧困な書生を養つて、自分の窮乏は少しも意に介しなかつた。劍客金子武四郎の如きは永らく崋山の家に居候をしてゐた。門人や食客に對してまことに寛大だつた。かつて或門人が彼の家に寄食してゐたが、此の男は大酒の癖があつたので師匠から戒められてゐたが、持つた病でどうしても改まらなかつた。時々大醉して歸ることがあつた。或時も酒氣芬々として歸つて來たが、さだめて先生の逆鱗にふれることだらうと思へば酔ひも一時に醒める心地で、恐る／＼前へ出て、叱られぬ先きに、

「先生、誠に相濟みません、又酔ひました」と言つた。

すると崋山はにつこり笑つて、

「うむ、只今お歸りか」と言つたばかりだつた。

其の門人は深く後悔して、其の後は決して大酒をしなくなつた。また或時、崋山は牡丹の大幅を描いてゐた。處が一人の門人が過つて畫幅の上へ墨をこぼしてしまつた。けれども崋山は何んにも其の過失を咎めず笑つて再び筆を染めた。

さういふ風に崋山の言行は非常に道德的であつたが、同時に彼は一面に於て酒々落々たる性格の所有

者だつた。明暗花柳の趣味もすむぶん解してゐた。品川にお竹といふ藝者があつた。崑山は大層お竹を寵愛してゐた。お竹も崑山に對しては勤め氣を離れて眞情を見せてゐた。二人の仲は可成り世間の評判に上つた。彼のさうした風流韻事の趣味は『つゞれの錦』(一名傾城買息子傳授)といふ洒落本の著述となつて發揮された。それは「天保八年あたりより一とせ前なる年のひたいの卯月十九日、居續の退屈に欠伸するいとま、酔ざめの冷水に筆を洗つて、たれもたのみもせぬに書す」と記した自序の終りの文章の通りである。之に高野長英が序を書いてゐる。崑山は之を書き上げてしまふと、品川の馴染の女郎に讀んで聞かせて處々批評をさせたといふ。

後代になると崑山と云ふと謹嚴正直一方の人かなんぞのやうに思はれて來たが、實際はそんなものではなく、彼も一面は頗る風流粹子であつたのである。それは文化文政の時代思潮であつた。酒ものます女遊びも解しないやうな野暮天で當時の文人墨客の交りができる道理もないし、又其の時代にはさういふ生活が別に不道德でもなかつた。併し其の徒の中でも寧ろ崑山は餘程の通人であつた。

彼は和漢の正文詩歌俳諧のほかに狂歌もやつた。蜀山人と親しく交際してゐたので其の影響を受けたのだつた。或時、中村樓で書畫會を催し、會が果てゝから、崑山、鵬齋、南畝の三人が興に乗じて吉原へ行つた。其の頃蜀山人はわけがあつて禁酒してゐた。それを承知の上で茶屋の女が無理に南畝の手を

把つて酒を飲ませた。

「南畝先生、そこらで一首ありさうなものですな」と崑山が言ふと、蜀山人は言下に、

我が禁酒破れ衣となりけり繼いで下さいさして下さい

門人

崑山の畫は飽く迄も寫生に立脚してゐた。それは自然の正しい象を重んじる西洋畫の影響を多分に受けてゐるのだつた。彼は所謂風韻だけで根柢のない空疎な畫を排斥して、何處迄も物象の眞を寫すことを以て畫の使命とした。彼よりも前既に司馬江漢は純粹の西洋畫を描いてゐた。彼の師事した文晁も屢屢其の長所を採つて自己の畫に應用したのだつた。それらの先輩の後を受けて出た彼は、蘭學を研究した結果として更にそれらの人々よりも數歩を進めた觀念を有つてゐた。けれども、崑山は蘭學以外に士道の感化を最も強く蒙つてゐる。西洋の新知識に憧憬れると同時に、東洋固有の思想、わけても武士道といふものこそ、彼が生きて行く上に於ての最大唯一の信條である。さういふ彼の境遇や思想は、直ちに彼を驅つて西洋畫へ走りしむることをば許さなかつた。そこで彼は支那人の中に憑據を求めて、支那の畫論を精讀した結果、遂に惲南田、王石谷に私淑して没骨寫生の畫風を自ら大成するに至つたのだつ

た。南田は清初の花鳥畫家で、石谷もほぼ同時代の山水畫家であつた。彼の描いた佐藤一齋、市川米庵の肖像の如きは、泰西の畫法から脱化して、頗る迫真である。かやうに彼は寫生を重んじたけれども、しかも筆墨の末に走らず、氣韻の超然たるものがあつて、飽く迄も南宗の所謂士大夫畫の精髓を發揮してゐるのだつた。

華山の大名は天下を風靡して、其の門下には秀才が雲の如く簇り集つて來た。門人の數は百數十を以て數へた。就中有名な者が十人あつた。俗に華山十哲と云つた。それは椿椿山、福田半香、岡本秋暉、山本琴谷、井上竹逸、平井顯齋、金子豐水、永井茜山、立原春沙、齋藤香玉等の人々であつた。

其の中でも椿山は最も傑出してゐた。椿山は花鳥を得意として、近世に於て彼に追従する者を見なかつた。彼は人と爲り慎密濃厚で決して人と争はなかつた。若年の頃の彼は至つて畫が不器用で、同門の者などでも彼を馬鹿にして「あれで繪かきになれるだらうか」と言つた位だつたが、併し繪が好きで熱心なことは到底他の者の及ぶ處ではなかつた。華山は彼の何處かに見處があつたと見えて、

「否、後來名を成す者は必ず仲太だ」と言つてゐた。

椿山は非常に瘦せてゐて、一見衣にも堪へないやうな體格だつた。それでゐて勤勉此の上もなかつた。彼は平山行藏に就いて長沼流の兵學を學んで、槍と馬とは允可を得た。熱心な讀書家でもあつた。其の

(華山十哲)  
椿椿山  
福田半香  
岡本秋暉  
山本琴谷  
井上竹逸  
平井顯齋  
金子豐水  
永井茜山  
立原春沙  
齋藤香玉

傍ら筆を習つたり、和歌俳諧を嗜んだりした。茶事には殊に造詣が深かつた。

彼は非常に濃厚な人だつたけれども、然し畫の依頼を受けた時に、先方の氣に合せやうなどいふ考へは毫頭なく、自分の思ふ儘に筆を執るのだつた。上州の豪商で澤某といふ人があつたが、椿山の畫を好んで常に揮毫を依頼するのだつた。或時も澤が絹を持つて來て、蘆雁の圖を頼んだが、其のあとで澤は椿山の門人に向つて、慙う言ひ置いて歸つた。

「先生の雁はうまいことはうまいが、いつもどうも雁が肥え過ぎてゐる。併し私の口からそんなことは言ひにくいから、今度は餘り肥えた雁を描かないやうに、貴下が側にゐてうまくやつて下さい」

正直な門人は其の通り師匠に言つてしまつた。すると椿山は「よし、よし」と答へたが、約束の雁を描く時になるといつもより、もつと／＼肥え太らせて、ちやうど牡丹の花か何かのやうな雁を描き上げた。澤が繪を取りに來ると椿山はそれを渡して言つた。

「今度の蘆雁はいつもより出來がよいつもりですから御覽下さ」  
澤は繪を展げて見て、澁柿を嘗めたやうな顔をした。

福田半香は遠州磐田郡見附の人であつた。二十歳前後の時江戸へ出て勾田臺嶺の門に入つた。臺嶺は山水を以て聞えてゐた。半香は從學一年ばかりで一旦歸省したが、家居三年、其の間鳥類の寫生に全力

福田半香  
勾田臺嶺

をそいいで、日課として一日に百羽の鳥を描いたといふくらゐ勉強した。再遊するに及んで華山の門に入つて教を受けるやうになつたのだつた。

半香は初めは郡名を取つて磬湖と號してゐた。處がある年同國掛川に遊んで、ある宴席に列した時、一人の藝者からの手紙を其處へ持つて來たが、表書きに「半香さま、まゐる」としてあつたので、半香さまとは誰の事だらうといふので座中を持ち廻つたが、結局それは磬湖の馴染の藝者が寄越したもので、磬湖を訛つてさう書いたのであることが分つて、一同手をうつて其の艶福を嗤し立てた。すると上客に松崎謙堂が居て、

「磬湖は平凡だ、半香の方が餘程妙だ」

と言つたので、それから半香と改號したのである。彼は山水を得意とした。殊に其の點苔に妙處があつた。彼は點苔を打つのに、トツチリトンを唄ひ乍ら其の拍子に合はせて打つといふので評判だつた。或る人が彼に向つて、

「先生はトツチリトんで點苔をお打ちになるといふがほんたうですか」と尋ねると、

「否、それは音曲を知らない者の言ふ事です。トツチリトンでは拍子に乗りません。私は長唄の獅子の曲の三味線——チンチンチン、テレントン——あの口三味線で打つのです。緩急の度合は手と心にあ

るのです」

と半香が答へた。彼は音曲の才があつて、長唄をうたひ、三味線をひき、十三絃の箏曲は雲井の曲まで學んでゐた。點苔の妙處はまつたく此の拍子の緩急伸縮を應用したのだといふことだ。

半香と岡本秋暉とは、同門とは云ひ特に親密に交はつてゐた。或時半香が、秋暉の許へ酒の切手を贈つた。秋暉は喜んで早速其の切手を酒に替へようと思つた處が、切手に記してある酒屋の名前の所が擦れてしまつてゐてどうしても讀めない。酒屋の名が分らなくては仕方がないので、半香に會つたら尋ねようと思つて大切に仕舞つて置くと、程經て半香に會つたので、

「時に、先日は酒券を頂戴して有難かつたが、實はあの切手の酒屋の名が讀めないで、残念乍ら未だに君の恩恵に醉ふことが出來ずに居るやうなわけだ。一體あの酒屋は何處です」と尋ねると、

「いや、あの酒券は實は僕も他から貰つたのだが酒屋の名が讀めないで、残念乍ら君の處へ呈上したわけさ。君の眼力を借りたら多分讀めるだらうと思つたが、矢つ張り駄目だつたのかね」と半香は酒々として答へた。

櫻間青崖は華山の莫逆の友であつた。青崖は三河の人で、岡崎藩に仕へてゐた。藩主本多忠顯は繪が

好きで自分も幾らか習つたので、青崖を鍾愛して常に側に呼んで繪を描かせ、世子に畫法を教授させたりした。青崖は初め片桐桐隱に學んで、山水の名手であつた。崑山でさへも「山水は青崖に及ばない」と言つたくらいだ。それは青崖を流行らせようとする崑山の好意からでもあつた。だから崑山は山水の依頼者があると青崖を推賞して紹介するのが常であつた。青崖が困つてゐるのを見て代作をさせたりしたこともあつた。

青崖は立派な腕を有つてゐたけれども極端な貧乏暮しをしてゐた。權門や富豪に媚びることは大嫌ひだつた。彼は非常な酒好きで、酒さへあれば苦情はなかつた。そして終身妻を持たずにしまつた。だが多少の家祿もあつて、それでたつた獨り暮らしなのに何故さう貧乏してゐたのかといふと、彼には一人の兄があつた。兄の名は練右衛門と云つて、是また文雅の士で、詩書をよくしたが、子供が澤山あつて家計を支へ難い有様なので、青崖は自分の受ける俸祿を全部兄の家へ送つてしまふのであつた。さうして自身は食ふ物も着る物もない境涯の中に晏如としてゐた。

某侯から、金と乗物を持たして青崖を迎へに寄越した。青崖は朝から酒を飲みたくて堪らないでゐたところへ金の顔を見たので、早速駕籠屋を使つて何升かの酒を買つて來させ、駕籠屋を相手にして飲み始めると、招待の事はとんと忘れてしまつた。一方侯のはうでは來賓が既に席に満ちたけれ

ども青崖が來ないので、再び使を走らせて催促に遣ると、すでに青崖は泥酔して氣絶あたるべからずである。

「何、客があるから繪を描きに來い！ 憚りながら青崖はベコ／＼お辭儀をして繪を描くやうな期間繪師ではござらん。歸つて左様お傳へ下さい」

天子呼來不上船、自稱臣是酒中仙といつた體たらくなので使の者も手が付けられなくて空しく歸つてしまつた。

崑山にはかりは青崖も推服してゐた。で、後には彼を崑山の門人のやうに誤り傳へたほどだつたが、元からの友人で、少しも遠慮はなかつた。或時も崑山が青崖から何かの粉本を借りたまゝ忘れて久しく返さずに居ると、青崖は急にそれが入用の事が出來たので、人を遣つて、手紙で催促したが、封書の表には「渡邊盜太夫殿」と書いてあつた。

一日崑山が青崖を訪問した。が、青崖は例に依つて囊中無一物で、折角親友が來てくれたのにもたすことができない。暫く經つと青崖は崑山に向つて慙う言つた。

「僕は一寸表迄出て來るから、どうか留守をして下さい。それから、暫時君の羽織を拜借したい」「宜しい、行つて來たまへ」

青崖は崋山の羽織を借りて着込んで出て行つたが、間もなく歸つて來ると、同時に酒肴が運び込まれた。

「さあ、何にもないが遠慮なくやつて下さい」

「やあ、これは恐縮々々」

主客は互に畫談を圖はせながら旺んに飲んだ。やがて日暮になつたので崋山は歸らうと思つたが、羽織がない。

「君、先刻貸して上げた羽織を出して貰ひたい」

すると青崖はヒヨコ／＼頭を下げて、

「いや何んとも申し譯がない。實は、折角の御光來ゆゑ、何がなと思へども生憎の無一物。止むを得ず尊公の羽織を借り、質に入れて、此の酒肴を調へた次第。それも最早飲み食ひしてしまつたから、君の羽織は我々の腹中に納まつてゐるといふわけです」

崋山は大笑ひして、

「さうか、それでは尊公に禮を言ふ所はなかつたな。ぢやあ、今日のは僕が奢りとして置かうよ」

と言つて暇を告げた。青崖はゴロリと横になると、脇を枕に雷のやうな鼻をあげ始めた。

崋山は常に門人に向つて、青崖の人と爲りと、山水に於ける手腕とを激賞し、

「お前達も時々青崖に會つて話を聽いて見るが、必ず得る處があるから」と言つた。

崋山は折々青崖を訪ねた。青崖は本郷に住んでゐた。崋山は大名を成して後も青崖を訪ふことを忘れなかつた。

或日、崋山が青崖の家へ行くと、白晝だのに戸がピツタリ閉めてある。「晝寢をしてゐるのかも知れない」と思ふので、戸を敲いて、

「青崖先生、青崖先生」と呼んで見た。

すると家の中から、

「青崖は今日不在でござる」

と答へたが、其の聲は正しく青崖である。崋山は不思議に思つて戸の隙間から覗いて見ると、青崖は素ツ裸で家の中に坐つてゐたが、邊りに着物らしい物もない。崋山は「は、あ」と氣が附いて、戸外を見ると、一枚の單衣物が洗濯して竿に掛けてある。手に觸れて見るともう乾いてゐた。崋山は其の着物を竿から外して、裏手へ廻ると窓の障子が破れてゐるので、其の穴から抛り込んで、

「先生、是でも御不在ですか」と言つた。

青崖は着物を取りに起たうと思つたが禪がなかつた。外から人が見てゐると思ふので彼は弱つて、傍らにあつた扇を取つて廣げて前に當てながら、窓の側へ行つて着物を着てしまふと、忽ち大聲をあげて、

「これは、何方でござる。青崖只今立ち戻りました」

尙齒會

尙齒會は、最初は至つて小人数の同志の會合であつたが、社會の機運が追ひ／＼蘭學に傾いて來るに従つて、會員の數も殖えて來た。會合には會員以外の者の出席は許さなかつた。崋山は隱然會長として其の牛耳を執つてゐた。

田原藩の海防事務官としての崋山は、常に其の新知識を應用して成績を擧げてゐた。彼は先づ諸外國の軍艦商船の形狀や其の旗幟の圖を作つて、沿海の役所へ渡して置いた。春秋二期には幕府の許可を得て軍事の演習を行つた。農民漁民を徵集して兵卒に用ひた。彼は夙くから熊澤蕃山に私淑して、その説く處の兵農合一の論に推服してそれを理想としてゐたのだつた。又、藩士村上範致を長崎へ派遣して、高島秋帆に就いて砲術を學ばせ、一般の子弟に傳習させて鍛鍊怠りならしめた。かういふ風であ

つたから、小藩乍らも田原の武名は遠近に聞えて、宇和島、西條、大垣、岡崎等の諸藩から、田原へ來て教習を求めるといふ有様だつた。

崋山は、尾關三英、高野長英の兩名を聘して、主人の三宅友信に蘭學を學ばせた。田原藩には進取的の風潮が鬱勃として生れて來た。

併し、愆う云ふ程度の事柄は、崋山に取つて兒戯に類するやうな物足りなさ、齒痒さを覺えずにはゐられなかつた。彼の野心は一年々々と眠らんで行つた。二十代の時分、脱藩して長崎へ行つて繪畫の修業をしようと思つたことがあつたが、其の時は病父の無言の諫めの爲めに目的を果すことが出来なかつた。其の頃からきざしてゐた海外の事物に對する憧憬は年一年と募つて來た。今でははや長崎くらゐでは満足がでななかつた。西洋の事情が詳しく分れば分るほど、廣い世界に向つて驥足を伸ばして見たかつた。イギリスや、フランスや、ポルトガルや、さういふ國々の、發達した文物制度の有様を想像して見たゞけでも、彼は眩惑するやうな氣持になつた。ナポレオンの偉業、ポーランドの滅亡、さういつたやうな歴史上の事件などもたゞ何んとなく彼を引き付けるのであつた。此の狭い日本の島國から一步も踏み出さずして一生を終つてしまふことはいかにも残念だつた。ましてや一萬二千石の小藩の家老で、百石ばかりの猫の食ひ料ほどの扶持を貰つて、人間一生を甘んじるわけにはいかなかつた。さう思ふと

彼は頻りに腕の鳴るのを覺えた。

「予が手は天下百世の公手、唐天竺迄も筆一本あれば公行出来申し候。ナントをしきものに無之や。嗚呼我を憐む人春山と足下ばかり也」

藩中隨一の筆山崇拜者である用人の眞木重郎兵衛に宛てた手紙の中へ、そんな文句を書いたりしたこともあつた。

徳川幕府に對しては、識者は悉く絶望してゐた。それは因習と積弊の固りで、何等の新しい生命もなかつた。天保の飢饉のあとを受けて、水野越前守忠邦がわづかに政權を支へてゐた。將軍は奢侈淫樂を事として政務を顧みなかつた。老中以下天下の役人は、賄賂を取ること、苛斂誅求を恣にするほかに何んの能もなかつた。三百諸侯も大部分は同じやうなものだつた。それは例へば病み衰へた老人の肉體のやうなものである。

さういふ國情に對して筆山は憂憤せずには居られなかつた。文政の初年イギリス船が浦賀へ來航して以來海防を急にせざるべからずといふ議論が志士の間に喧しくなつた。海防は勿論緊要の事には相違ないが、西洋諸國を蠻夷と稱して、一概に侮蔑して、外國船と見たら直ちに打ち攘つてしまはうといふ幕府の方針は、筆山等のやうに西洋の事情に通じてゐる者の眼から見ると、嗤ふべき愚論で、其の結果は

反つて國家を危機に陥れるのみである。それは畢竟日本人が、世界の存在にすら氣がつかないで居るのが原因である。筆山等が洋學を鼓吹するのは、其の蒙を啓かんとすることが第一の目的であり、使命である。

天保九年三月和蘭陀甲比丹ニイマンが江戸へ來た。ニイマンはアムステルダムの子で、今年四十二歳であつた。彼は身の丈七尺三寸、肥え太つてさながら牛のやうな男だつた。非常な讀書家で、食事をしながらも、駕籠の中でも、雪隠でも、書物を手から放したことはなかつた。人に向つて彼は、江戸の町數、橋數、戸口、御城の廣狹、寺社、邸宅等の事を尋ねた。併し一人としてそれに對して満足な答へをなし得る者はなかつた。ニイマンは笑つて、

「日本の人は學問に不熱心だ」と言つた。

筆山は、高野長英、尾關三英と共に、ニイマンと對談して、西洋の事情を色々尋ねた。そして其の問答をば筆山が筆を執つて書いた。彼は其の著述に「缺舌或問」の題を冠した。

其の年のこと、英人モリソンが、本邦の漂流民七名を送つて來航し、直に江戸近海へ來つて通商互市を要求するといふ風説が盛んに傳はつた。長崎奉行久世伊賀守は、事態容易ならずとして、開老水野越前守へ右の趣を報告した。此の事について幕府では閣議を開いた。越前守は流石に事理に通じてゐ



た。彼の意見は、先年オロシアの使者レサノツトが渡來した時の例に則つて穩便に應待しよると云ふのだつたが、評定所の衆議は全く之と反對で、

「英吉利の夷狄共は、先年から我が近海を犯すこと屢々である。其の專横は許すべからざるものだ。且つ彼等は我が國禁の切支丹を奉ずる輩であるから、旁々以て近付くべき者ではない。彼等が眞に通商を乞ふだけの意志であるならば、長崎へ來るのが當然である。然るに國都近い所へ船を寄せるといふのは已に禮を失してゐる。漂流民を憐まざるわけではないが、國家の大利害には代へられない。宜しく文政年間（一八二〇年）に布かれた御法度の主旨に依つて、用捨なく大砲を以て打ち拂つてしまふが宜い」

と評議が一決した。越前守は再三異議を唱へたけれども彼の意見も大勢に押されて通らなかつた。それは十月のことだつた。此の事が傳はると、川路左衛門尉、江川太郎左衛門等からも上書して、その策の不可なることを論じたけれども採用されなかつた。それは勿論尙齒會でも問題になつた。華山は、いづつもながら爲政者が無識であるため、遂には社稷を危くする機會が到來するであらうと思ふと憂憤に堪へなかつた。

翌天保十年の正月、華山は「慎機論」を書いた。それは一氣呵成に一と晩で書さ上げたものだつた。彼は此の論文中で、日本へ來航するといふ噂の主人公モリソンの人物に就いて詳しく説明した。モ

リソンは英吉利龍動の人で、廣東の商館にあること十六年、廣く唐山の學に通じ、五車韻府、周易、通鑑綱目、東華錄、西域碑文、地理志等の翻譯又は著述があつて、本國に於ても重んじられてゐる人である。斯かる顯名の士が來るについては必ず本國の使命を帯びて十分の準備をとゝのへて來るに相違ない。それを理非も問はず大砲を以て追ひ拂ふなどは以ての外のことである——といふ事から、宇内の形勢、西洋の國情に互つて彼は該博なる知識を傾けて論及した。そして此の度びの如く、無謀の事を敢てせんとする時には、終に國を亡すに立ち至るであらうと論じた。最後に至つて彼の筆は激して、世人の僻見を井蛙の管見と罵り、

「嗚呼今夫是を在上の大員に責めんと欲すれども、固り統袴子弟。要路の權臣を責めんと欲すれども、賄賂の伴臣。唯是有心者は儒臣。儒臣亦望淺うして大を措き小を取り、一々皆不痛不癢の世界となれり。今夫此レ如東手して寇を待たんか」

と書いて筆を擱いた。

もとより世に出すべき文章ではないから、かうして鬱憤を紙上に吐いたのであつた。其の儘机の抽斗に入れて置いて、同志の者が來た時にだけ出して見せた。長英に、

「貴公の夢物語の向うを張つて恁んな物を書いて見た。一つ讀んで見てくれたまへ」

と言つて出して見せると、長英は一讀三嘆して、  
「あなたには文章に力があるから、到底敵はない」と言つた。

無人島事件

幕府の目附役に鳥居耀藏といふ者があつた。後に甲斐守と云ひ町奉行を勤めた。耀藏は、幕府の儒官林大内記衛の次男で、大學頭燦の弟である。彼は天保七年の大鹽平八郎の獄を斷じて以來、水野越前守の信用を得て、其の足手となつて働いてゐた。

耀藏は、自分の役柄から云つても、また生れた家の立場から云つても、蘭學を排斥しなければならなかつた。彼の父大内記が、匿名で流布されて將軍の内覽にまで入つたと云はれた長英の「夢物語」を讀んだ時の駭きは大した者だつた。大内記は悴の耀藏を呼び寄せて、

「恚んな本を書いた奴がある。引つ捕へて首を斬つてしまへ」と怒りにわななきながら叫んだ。

父に言はれなくても、耀藏は勿論其の用意は怠りなかつた。彼は密かに關老越前守に訴へて、「英吉利人來航の噂も、畢竟蘭學者と稱する輩が、些か外夷の事情に通じてゐるのを幸に、無實の事

を捏造して、不埒の妖言を逞うし、上を惑はし、下は無智蒙昧なる愚民を煽動して天下の騒亂を促さうとする所存と覺えます。此の際一網打盡に彼等を召し捕り、向後一切蘭學を禁止させたならば、國策上最も宜しきかと存じます」と言つた。

越前守も幾分蘭學者を疑つてはゐたけれども、耀藏の進言を容れて直に其の舉に出るのも穩當でないと考えたので、その時は聞き捨てにして置いた。

天保十年正月、耀藏は、浦賀海岸を検分して測量圖を製作すべき役を命ぜられた。當時浦賀の代官は江川太郎左衛門であつた。江川も自ら幕府に願つて鳥居と共に其の役を勤めることになつた。が、江川と鳥居とは正反對の思想主義を有つてゐた。江川は前から華山等と親交があつて、略々西洋の事情に通じ、洋學の重んずべきを唱へてゐた。外國船來航の事に就いても、擊攘の不得策であることを建白したのでつた。からいふ立場の異つた兩者が共同の任務に従事するのであるから、其の間頗る意志の疏通を缺いてゐた。鳥居は部下の小笠原貢藏なる者が幾分測量術の心得があるのを幸ひ引き連れて行つて、江川には少しも相談なしで勝手に測量圖を作らせた上で、其の製圖を江川に示した。それは測量式に協はない粗漏杜撰なものだつた。江川は内心駭いたけれども其の場は黙つて済ませて、早速華山の許へ急使を馳せ、然るべき測量家の周旋を依頼した。華山は長英と相談して、長英の門人内田彌太郎を派

遣した。江川は内田に命じて浦賀海岸の測量を洋式で詳細になさしめて、江戸へ歸ると更に華山や長英と相談の上で完全な製圖をして、精密な説明書を付けて幕府へ提出した。鳥居も小笠原の作つた測量圖を差し出した。其處で幕府の重臣は此の二通の測量圖を検査したが、其の精粗深淺は到底比較になる物ではなかつた。誰も彼も江川の提出した物のはるを非常に賞讃して、直ぐにそれが採用になつた。江川は大いに名譽を博した代りに、鳥居は功を江川に奪はれ面目を失したので、それを深く遺恨に思ひ、江川の背後に附いてゐる華山一派の蘭學者達に對する憎惡猜忌の念を一層強めるやうになつて、いかにして此の遺恨を霽さうかと密かに時機の到來を待つてゐた。

丁度其の頃のこと、交替寄合福原内匠家來齋藤次郎兵衛、御徒士本岐道平、常州鹿島郡鳥栖村の一向宗無量寺住職順宜、深川佐賀町の蒔繪師秀三郎、其の他を合せて十人ばかりの同志が、伊豆南海の無人島を開墾しようといふ秘密計畫を進めてゐた。彼等は、尙齒會の人々に向つて其の後援を依頼して來た。尙齒會では評議の結果、其の依頼に應じて、無人島へ出航の際には、華山、長英の首領株を初めとして數名同行することになつた。就中華山は此の計畫に對して非常な興味を持つてゐた。彼は先年伊豆の代官羽倉外記からも無人島の話を聞いたことがあつた。其の島へは常に外國船が碇泊するといふことも其の時知つたのだつた。彼は今度一行の者と共に無人島へ航行しても、其處に永く留まる考へではな

かつた。自分一人は、外國船が來次第それに搭乘して外國へ行く決心を固めてゐた。彼は全く日本の國土に對しては未練は持つてゐなかつた。妻子や、殊に年老いた母の事を考へると不孝の罪に責められて胸が痛くなるが、併し、恩愛の情にほだされて此の機會を逸しては終生の恨事だと考へた。日本の國內では最早彼のする仕事はなかつた。併しながら彼はまだ幾らでも働ける健康な體と、無限の精力を持つてゐる。此の上はたゞ國外へ脱出して、廣い自由の天地で思ふ存分活動して見たい、と考へるのであつた。

無人島渡航の計畫は、誰からともなく外間へ漏れてしまつた。鳥居耀藏は此の事を耳にしたので、部下の小笠原貢藏に命じて探偵させた處が、尙齒會の蘭學者が關係してゐることが分つたので、華山一味の蘭學者共を一網打盡に滅すべき好機が到來したと大いに喜んだ。彼は尙ほ貢藏に命じて種々の畫策をめぐらしてゐた。すると爰に本丸の庭番を勤めてゐる花井虎一といふ者があつて、虎一も矢張り無人島渡航の同志の一人だつた。貢藏は其の事を探知して、虎一とは惡意の間柄だつたので、私かに彼を呼び寄せて脅迫の言辭を弄して言つた。

「近頃蘭學者共が相謀つて密かに徒黨を結び、國禁を犯して無人島に渡航して異國人と交易をなさう目的で既に準備も致して居る様子、お上に於ても容易ならぬ事に思召されて、至急彼等を召し捕つて嚴

重に御吟味をなされる筈で、目下其の手に配中である。然るに確かな筋から聞いた處に依ると、貴殿も其の徒黨に荷擔して居られるといふこと、果して事實であれば貴殿の身の上を取つて容易ならぬ一大事、日頃のよしみを以て御忠告申す次第、何事も包まず話されよ」

虎一は元來應病者でもあつた。彼はすつかり顔へ上つてしまつて、同志に關する秘密を悉く喋つてしまつた。そして、どうかして自分だけ助けて貰ふ法はないか、と言つて貢藏に嘆願するのだつた。

「實はそれに就いて貴殿に御相談致さうと思つてお呼び申したのだ。悪い事は云はないから有りの儘訴人なさい。そして貴殿は彼等蠻學者共の教唆に乗つて一時は同志に加つたけれども、前非を後悔して訴人致したとあれば格別の御咎めはござるまい。否、拙者からも鳥居殿まで内願して置くに依つて、其の結果は、反つて貴殿の爲めに大利益となるでござらう。其の點は決して御心配には及ばない」

と貢藏は言つた。花井は一も二もなく其の氣になつて、お目附鳥居耀藏の許へ、無人島一件を訴へて出た。

下 獄

天保十年十月十四日の朝であつた。其の朝華山の宅を高野長英が訪問した。すると、華山は長英に向つて、

「昨日、水野越州の家來で小田切要助といふ人が僕の處へ來て、先生は近々虎の尾を踏むやうな危難に遭はれるだらうから御用心なさいと言ひ置いて歸つた。近頃幕府では蘭學者を捕縛して獄に投じようといふ内議もあるとかいふ風説、是は足下も耳にして居られるであらうと思ふ。それに就いては例の鳥居耀藏のさしがねが働いてゐることは無論だが、聞き及ぶ所では、最近の事、天文方の濫川六藏からも蘭學取締りの建白書を出したといふはなした。小田切の言と云ひ、とにかく我が黨に危険が迫つてゐるらしい。どうも困つた事だ」と言つた。

長英は隼のやうな眼をキラ／＼光らせて、

「そんな風説だけは僕も聞いてゐる。が事實とすれば怪しからんはなした。蘭學をするのが何が悪い。我々は國家の利益の爲めに蘭學を研究してゐるのだ」

「勿論さうだけれども、井蛙に等しい彼等の眼にはさうは映らないのだから仕方がない。君の夢物語にしても僕の駄舌或問にしても、憤機論にしても、我が黨としては尋常茶飯事の事柄だが、愚昧な世人の眼には妖説とも怪説とも思はれるだらう。何れの國何れの時代でも進歩した學説を唱へる者は、常に世

の中から迫害されるものだ。だから我々も其の覺悟は持つてゐなければならぬ」

「それは大いにさうだ」

「とにかく、御同様少し用心しなければならぬよ」  
さう言つて話してゐる處へ、三宅家の留守居役から一通の書狀が届いた。開いて見ると、それは町奉行大草安房守からの呼び出し狀だつた。

渡邊登儀、御尋の筋有之候に付、差添人付添、即刻安房守役所へ可罷出候也。

華山は長英を顧みて、靜かな口調で、

「高野氏、もう來た。かうなつては最早仕方がない、足下も氣を附け給へ」

長英は緊張した顔付をして、黙つて首肯した。

華山は用人眞木重郎兵衛附添の下に町奉行所へ出頭した。簡単な調べがあつて直ぐ様揚屋入りを命ぜられた。

同時に華山の家に與力同心が出張して嚴重な家宅搜索を行つた。そして、數十葉の草稿と、蘭書、往復書狀等を取り交せて、長持一個に押收して持ち還つた。併し、役人達は家宅搜索をする時、小藩乍らも家老の末席に列する華山のことだから、定めて家財衣服什器の類も相應に澤山あるだらうと思つて

來た處が、豈計らんや目ぼしいものと云つては只だ書籍書畫の類があるばかりで、他には何んにもなかつた。役人は怪しんだ。

「衣類は之だけか」

「左様で御座います」

「さうではあるまい、いやしくも家老を勤める身分で之ばかりといふことはない。何處ぞへ隠してあるだらう」

「決して左様な次第では御座いません。全く宅には之だけしか御座いません」

「否々、必ず隠して居るに相違ない。偽りを申されるとお爲めにならんど」

妻は弱つてしまつた。しまひに彼女は質屋の通帳を持つて來て役人に見せて、

「御覽下さいまし、宅は此の始末で御座います」と言つた。

役人達はそれで漸ら納得して引き上げた。

華山と前後して捕縛された人々は、

交替寄合福原内匠家來

道山半左衛門組下御徒士

藤次郎兵衛

本枝道平

常州鹿島郡鳥栖村一向宗無量寺

同 悴

深川佐賀町蒔繪師

本石町三丁目五人組持店旅人宿

御小人頭 柳田勝三郎御納戸番

御留守居松平内匠守與力青山義兵衛地借町醫師

順 宜

順 道

秀 三郎

彦兵衛後見金次郎

花井 虎一

長 英

の八人であつた。此の疑獄は天下の耳目を聳動した。蘭學者は一人残らず召し捕られるといふ説が高かつた。尾關三英は、往復書類の全部を焼いて自殺を遂げた。佐藤信淵は、草稿全部を持つて下總邊へ遁れて潜伏した。華山の取調べは大草安房守役宅で開かれた。吟味掛りの與力は中村嘉右衛門であつた。尋問は非常に嚴重を極めた。華山は、蘭學の問題に就いては、

「私儀の蘭學は、只翻譯物にて吟味致したのみで御座います。其の譯は、私主人の領分が海岸でござりますので、元文以來厳しく仰せ出されてある御趣旨に基き、外國の事情を搜索し、主人の顧問にも備へたき心底にて、蘭學に依つて取調べました次第でござります」と答へた。

「其方は齋藤次郎兵衛なる者と悪意に致し、齋藤が外國の事など聞きに其方宅へ参り、殊に近々無人島

へ渡航して、外國と交通を致さうと企んだ趣、此の儀は如何」

「一向存せぬ事と申す。齋藤と申す者は、花井虎一の紹介にて去年一度私宅へ参りました。なれども左様の儀に就いては一言も話した覚えはござりません」

無人島問題に就いては、華山が直接關係したといふ證據は擧げなかつた。他の人々も華山を庇護して絶対に其の事を否認するのだつた。無人島一件の首謀格の齋藤次郎兵衛は、六十六歳の隠居の身分だつたが、剛毅朴訥で意氣甚だ旺んだつた。

「無人島へ渡つて未開の地を開拓致したいといふ事は、私年來の望みで御座います。行けるものなら、今日只今でも参りたり存じて居ります」

と次郎兵衛は公判廷上で憚り氣もなく公言した。

「其方渡邊登を訪問致した趣だが、定めて無人島の事に就いて登と談合したであらう」

「否、何も話しません」

「では何んの爲めに登宅へは参つたのだ」

「左様、華山といふ人は高名な人で御座いますから、顔を見ただけでも見得だと思つて参りました」と次郎兵衛は答へた。

吟味掛りの與力中島嘉右衛門は、號を雪居と云ひ、畫をよくして、平常華山と交際があつた。彼は華山の人物性格をよく知つてゐて、少からず推服してゐる一人だつた。それだけに中島は今度の調べでは當惑した。奉行大草安房守も華山に同情してゐたけれども、上からの命令に依つて發してゐる事件だけにどうすることも出来なかつた。

「登、其方は何人からか遺恨を受けてゐる覚えはないか」と安房守は尋ねた。

「私儀は、何人にも恩を施しません代りに、遺恨も受けるやうな覚えは毛頭ござりません」と華山は答へた。家宅搜索に赴いた役人は、華山の居室の壁書にしてあつた稽叔夜の養生論の一節を剝ぎ取つて押收して來た。それには、

思慮鎖ニ其精神一哀樂歿ニ其平粹、夫以三最爾之軀、攻之者非一途、易レ塌之身而内外受レ敵、身非ニ木石一其能久矣

と記してあつた。中島はそれを華山に示して、

「之は何時書いた物だ」と尋ねた。

「先年病中無聊の餘り、稽康の養生論中より抜抄して認めました」

「當今其方の身分は丁度此の語に相當して居るではないか。して見ると其方は大きに先見の明があつた

譯である」と中島は皮肉な調子で言つた。

「何心なく面白く思ひましたので、壁書に致しましたが。今日遂に裸綫の身となりました事は、實に不審の至りと申すのほかはござりません。さるにても悔り難きは天命でござりまする」

と華山は正直に忿然として答へた。

矢張り押收された華山の藏書の中に蘭文の地理書があつたが、其の中の日本無人島略記の項に、ところどころ不審の箇所へ紅唐紙が貼り付けてあるのを示して「是は何んの爲めか」と言つて詰問すると、華山は即座に、

「私は存じません。多分前所有者の致した事でござりませう」

と答へたので、人々は彼の頓智の巧妙に驚いた。

併し、如何にしても言ひ脱けの出来ないのは、未定稿の儘ながら彼の「憤機論」の草稿であつた。猥りに鬻夷を崇ぶに似たる言辭を弄して神州の威を輕んじ、剩へ天下の政道を誹謗して「當路大臣は統袴子弟、在官權臣は賄賂の倖臣」と罵り「今夫如此束手して寇を待たん」と云へるに至つては、其の罪甚だ輕からざるものと見られてゐた。

判決は容易に決し難くて、延引に延引を重ねてゐた。一方では、事件發生以來華山の助命運動の爲め

に多くの有志が奔走してゐた。藩主三宅土佐守や隠居の三宅友信は一方ならず痛心して、どうかして華山を救ひ出さうと、巨下を八方に馳せて動靜を窺はしめ、平素親交のある諸侯の盡力を乞うたりした。門人知友の人々も、死に物狂ひになつて運動した。さうして百方手段を講じたけれども効果は現はれなかつた。それは幕府の方針が極端に蘭學排斥に傾いてゐたからであつた。

夏が來ても、華山は獄中で暮さなければならなかつた。其の牢屋は、三間に四間位の廣さで、板敷の上に疊を敷いて、華山は特別扱ひで一疊を一人で占領してゐたが、他の者は牢役を持つてゐる者でも一疊に二三人位、平のものは一疊に六人位坐せられてゐた。多くは博徒、小盜の類だつた。牢名主までが華山を「先生、先生」と崇めて、日常の小用はすべて、小座といふ平の罪人の者が召使のやうに働いてくれた。中村嘉右衛門の好意が牢内へよく行き届いてゐたので、牢屋にゐても世間と祕密に文書の往復も出來た。椿山や眞木重郎兵衛からは數回の書面が來た。けれども、不潔と光線不充分的爲めに健康を害するので弱つた。彼は温疫を病み、疥癬に悩んで、一時は死にさうに苦しんだ。

それも中島の親切な手當のお蔭で、辛くも命をつなぐことが出來た。或晩牢獄の中で沈黙考して、行く末來し方の事など思ひ耽つてゐると、何處で啼いてゐるのか秋蟲の音が聞えて來た。

助 命

秋むしはおのが草葉に音を鳴きて箆のうちにきく身こそ悲しき  
と華山は口ずさんだ。

華山の助命運動が遅々として容易に効を奏さないのを見て、最後に憤然として起つた人があつた。それは一代の鴻儒松崎懺堂であつた。

懺堂は肥後國上益城郡木倉村の産、農夫源藏の孫である。父は惠芳と云ふ何處の者とも知れぬ行脚體の僧だつた。源藏に二人の娘があつて、姉はげんと云つたが、智養子をして女子を一人儲けてから事情あつて其の智を離縁して獨身で暮してゐた。其處へ惠芳が藥を賣つたり灸點などして旅をして來て折り源藏の家へ泊つたのが縁となり、何時となくげんと夫婦になつて暮すやうになつた。そして夫婦の間に出來た松次郎といふ子が、後年の松崎懺堂だつた。懺堂は十一歳の時、或眞宗の寺へ小僧にやられたが、性來讀書が好きだつたので學問で身を立てたいと思つて、十三四歳の時國許を出奔して江戸へ出て來た。其の後非常な艱難辛苦して林家の門人となつて修學した。其の頃のこと、或時郷里の人を送つて品川迄行つたが、日が暮れたので娼家へ泊つた。夜半に彼は眼が醒めたので、起き上つて燈下で書



物を讀んでゐると、相手の女がそれを見て「貴方は何故寝ないで本を讀んでゐるのです」と言つて尋ねた。謙堂は「自分は苦學の書生で晝の間は讀書の暇がない。それで夜ばかり讀書をすることにしてゐるのだ」と言つて自分の境遇を話した。すると女は、

「貴方が一ヶ月學問をするにはどれ位のお金が必要のですか」と尋ねた。

「二分あれば十分一ヶ月の學資は足りるのだが、僕はなか／＼それ程は使へない」

女は、

「二分位のお金は妾の白粉代を儉約すれば出来る事ですから、これから毎月妾が學資金を送つて上げませう」

と言つて、女は其の後月々、缺かさず二分宛謙堂の處へ仕送つて呉れた。其のお蔭で彼は學問に勵むことが出来た。學業が成つて謙堂は、掛川藩太田備中守に召し抱へられた。其の頃は品川の女は年が過ぎ色香も衰へてゐたけれども、彼は其の女を落籍して妻にした。謙堂の名聲が高くなつたので、細川侯が、元來其の封内の民であるといふところから、彼を召し還して太田家に數倍する高祿で抱へようとして、掛川侯へ交渉した。其の時謙堂は、

「出女は改めて娶ることが出来るが、釐婦は再び嫁すべからざるものである。君臣夫婦は其の義が同じ

ものである。自分が掛川に歸してから十年の間に、三君が簀を易へられた。これ三度び所天を喪つたのと同様である。決して他に移ることはなりません」と言つて應じなかつた。

謙堂は學問博大胸中幾萬卷の蘊蓄があるとも知れなかつた。文政天保の間に、佐藤一齋と謙堂とを以て大儒と稱した。併し乍ら實際の學力に於ては一齋は謙堂に及ばず、たゞ一齋は人物聰敏で、世事に練通してゐたために謙堂と同等の名聲を維持することが出来たと云はれた。

天保十年の此の年謙堂は七十有餘の老齡だつた。加ふるに、彼は此の頃霍亂を病んで衰弱を極めてゐた。其の病氣がどうやら鎮まつて、まだ外出は出来ないけれども、床の上に坐つて居られる程になつた。彼は華山の事が心配に堪へないところから、病を勉めて筆を執つて關老水野越前守への建白書を起草した。そして門人小田切要助を介して忠邦の手許へ提出した。謙堂の建白書はまことに千古の文章と云ふべきものであつた。彼はそれに依つて、先づ華山の人と爲りを説き、憐憫を加ふべき情實の存在を縷述し、一轉して、彼の慎機論が朝政誹謗の罪に問はれて居ると云ふことだが、元來政治誹謗の罪などといふものは聖賢の世に於てはあるべき道理がないといふ理由を、春秋戰國、唐、明、清の諸律に對照して證明し、飽く迄も其の無罪を訴へ、若し世に公にせざる反古を證據に罪を問はゞ誰かは罪人ならざらんやと痛論し、更に一轉して、親友の義を破り、己れの榮耀を謀る讒訴人花井虎一の言が果して

行はれたならば、恐らくは天下の物議を生ずるであらう、宜しく花井を誣告罪に問ひ、反座せしむべきであることを論斷した。條理明晰で十分に懺堂の識見を發揮すると同時に、華山の性行を敘し得て遺憾がなかつた。

懺堂の建白書は、華山を救助する上に非常な力強い効果をおよぼした。それまで幕府有司の意嚮は絶對に華山死刑に一致してゐたのだが、懺堂の建白書を読んで先づ越前守が動かされた。

其の年の十二月十九日に至つて、華山に對する宣告が漸く下つた。華山は死一等を減ぜられ於て在所一蟄居を命ぜられた。

華山は八ヶ月の牢獄生活から漸く脱して我家へ歸つた。老母や妻子の喜びは云はうやうもなかつた。一藩の人々も初めて愁眉を開いて吾が事のやりに喜んだ。友人門弟をはじめ、曾て出入した諸侯旗本の使者、或は出入の商人などまで、喜びを演べようとして訪ねて来る者が引きも切らなかつた。併し、華山は、

「御厚志は忝ないが、自分は今も尙ほ罪を蒙つて蟄居謹慎の身の上であるから、お目に掛る事は出来なす」

と言つて、誰にも面會しなかつた。愈々田原へ出發の前夜になつてから、彼は潜かに巢鴨の別邸へ伺

候した。それは、或は一生の訣別になるかも知れないから、友信公にだけは一と目お暇を申し上げようとおもつたのである。友信は喜んで、側近く細々と物語りをした。華山が、明朝未明に出發する旨を申し上げると、友信は潸然として涙を浮べ、

「予は父に訣れるやうな心地がする」

と言つた。

華山も涙に暮れながら、惜しき暇を申して立ち歸つた。

命の親松崎懺堂にも、感謝状を送つたのみで、わざと對面しなかつた。

天保十一年正月十三日の拂曉、華山は警固の役人に衛られて、乗物で田原へ向つて護送されることになつた。三宅家よりの附添として鈴木孫助、門人總代として福田半香、その二人が駕籠脇に附いて行くことを許された。華山の出發を知つてゐる人々は、せめてよそ乍ら別れを告げようと思ひ、未明から其の家の門前に集つて來た。華山の乗物が出發すると、人々も其の左右前後に附き添つて歩き出した。高輪の大木戸迄行つた時、華山は駕籠の中から窺れた顔を差し出して、はじめて人々に告別の言葉を掛けた。

道中の警固は嚴重を極めた。錠附の駕籠で、兩便も其の内では便しなればならなかつた。

其の苦痛は名狀し難かつた。永い牢獄生活で身體が衰弱し切つてゐる上に、例の濕瘡がまだ全快しないので、堪へられぬ苦しみであつた。箱根山では劇しい風雪に遭つた。身體の冷えから腹痛を催して、甚だしく下痢した。それでも休まずに進んだ。病苦は刻一刻と募つて來た。遠州掛川で泊つた日には、總身から冷汗が流れて、遂に氣絶してしまつた。戸塚隆伯といふ醫者を頼んで服藥をして、一日逗留した。さういふ中でも彼は例の帳面を手持つてゐて、面白い沿道の風景を見ると寫生することを忘れなかつた。

一月二十日に漸う田原へ着いた。一時預り人某の宅へ落ち付いたが、依然として、晝夜とも警戒が厳しかつた。

家族の者も後から江戸を引き上げて來た。二月十六日に居室を與へられ、はじめて一家團樂の生活をする事ができるやうになつた。

### 田原幽居

其の家は田原の城下から北の方へ三四町距つた處にあつた。池の原といふ處で、藥肆家だが、屋敷は可成り廣く、晝室にする離れもあつて、周圍には田や畑が続いてゐた。

江戸で暮しつづけた華山には、かうした田園の生活が珍らしく感じられた。彼は、非常に落ち付いた心持で日を送つた。漸く物心が附き始めた頃から貧乏の苦を味はつて、其の後は四十年の永い年月をあれやこれやと追ひ立てられ、一寸の餘暇もなく暮して來た過去の生涯を振り返つて見ると、さながら夢のやうな氣持がした。夜半に風が荒れて、濤の音を枕へ近く聴いたり、淋しい入り日の影が障子に映つたりするのを見ても、華山は幽居の身の上を悲しくは思はなかつた。彼は、悠々として易書などを讀んでゐた。

華山のとを慕つて、鈴木春山だの、砲術家の村上定平なども田原へやつて來た。其の外劍客杉山大助、儒家大藤大三郎等も前後して田原へ來て居をトした。門人平井顯齋、山本琴谷の兩名は、師匠の家族を送つて江戸から來て其の儘田原に留まつてゐた。それらの人々は夜となく晝となく訪ねて來て、學術技藝の話に耽つたり、繪事に就いて談じたりした。

平井顯齋は遠州榛原郡川崎の人であつた。顯齋は初め文晁に師事し、後華山の門に入つた。顯齋は中年以後、多く郷里で終始したがために畫名が中央に顯れずに終つたが、其の畫才は同門の半香を凌ぎ、山水を最も得意とした。顯齋の山水畫は、文晁華山の長を把り、蒼雅と道勁を兼ね、最も華山の衣鉢を傳へるものがあつた。彼は晩年三谷山樵とも號した。

平井顯齋  
山本琴谷

琴谷は人物畫において知られてゐる。

主家から受ける手當だけでは生活が立たなかつた。それに去年の事件發生以來費えた金も少くなかつたので、現在の生活は一層苦しかつた。で、折り／＼は依頼物の繪を描いて、其の收入で僅かに支へてゐたが、これとても高の知れたものだつた。

其の頃華山はある人の依頼に依つて、醫聖ヒボクラテスの肖像を描いた。それは華山の肖像畫の中でも最も傑作だと云はれた物だつた。華山は、田原へ幽居後の畫には皆天保二三年の年號を入れた。幽居の身分を憚つて殊更に年代を變へて記したのだ。

其のうちに幕府の壓迫が日に増し加はつて來た。家中の人々に對しても、華山の處へ往來することは宜しくないといふ沙汰があつた。華山自身が他へ文通をする事にまで干涉するやうになつた。併し華山は別に不平も云はなかつた。

六月に入つてから半香が飄然として再び訪ねて來た。華山は喜んで、病身であるので旅が出来ないと云つて残念がつてゐたといふ椿山や、其の外いろ／＼な人達の言傳てやら、消息を聞くやらで、夜は更けても談は盡きなかつた。と、半香は笑ひながら一通の手紙を出し、  
「それから先生、もう一つお楽しみの手紙を持つて參りましたよ」と言つた。

「何んだ、お楽しみの手紙とは」

「是で御座います、どうか御覽下さいまし」

と言つて半香は其の手紙を華山に渡した。見るとそれは品川のお竹からの文だつた。さすがの華山も思はず笑顏を作つた。半香は半月餘り師匠の家に逗留した。が、其の間に、華山の家計が餘り苦しいのを見るに見兼ねて、

「先生、是では御老母や奥様が續きますまい。如何でせう、私が江戸へ歸つて、先生の畫會を興さうと思ひますが、お許し下さるでせうか」

と或日華山に相談した。華山は、自身の現在の身分から云つても、畫會などいふ華やかな事をして貰はうとは夢にも考へてゐなかつたことだが、半香にかう言はれると心が動いて來た。半香は熱心に畫會の方法などに就いて自分の考へを話すのだつた。

「ではまあ、成る可く目立たぬやうにやつて貰ひたい」と華山は言つた。

半香は江戸に還ると直ぐ祕密に畫會の運動に着手した。幽居の華山を慰藉するといふ目的の其の畫會は忽ち多數の賛成者を得た。其後華山は月々畫會の幅を揮毫してゐた。

其の年、三宅家では土佐守が隠居して、養子們太郎が家督を相續した。

顯齋、琴谷の二門人も、いつ迄もかゝる片田舎に居ては當人の身の不利益であると言つて、華山は勸めて再び江戸へ上らせることになつた。愈々明日は出發といふ晩、師弟三人酒を酌み交して名残を惜しんだ。其の時華山はふと思ひ出したやうに、

「平井、お前に一つ頼む事がある」

「何んで御座います」

華山は起つて書棚から一枚の書き卸しを持つて来て、

「頼みといふのは是ぢや、まづ一覽せ」と自分で展げて見せた。それは藝者姿の若い美人を描いた風俗畫だつた。髪のかたちや、容貌がさながら生きてゐるやうに描かれてゐて、黒の紋服を着た裾模様には雪持竹が描いてあつた。

「是は先生誰の姿で御座いますか」

「お前も話には聞いてゐよう。是は品川のお竹の姿だ」

「あ、いかにも承つて居ります」

「處で、お前に托するから、彼の手に届けては呉れまいか」

「お易い御用で御座います」

「併し強ひて届けるにも及ばぬ、序であつたら届けて貰ひたい。序でがなければお前が所持してゐても差し支へない」

「委細承知致しました」

「では、一寸題詞を書かう」

華山は直ぐに筆を執つて其の畫の餘白へ漢文で題詞を書いた。此の繪は華山の傑作の一つとなつた。半香が肝いりの畫會の事は何時となく世間へ知れてしまつた。中にはそれをよく言はぬ者もあつた。

「華山は蟄居謹慎の身を以て、交りを世間に求め、有志と交通し、剩へ門人を驅使して畫會を催し、金錢を集めるとは、上を畏れぬ振舞である」

と言ふ者もあつた。其の事に依つて近々幕府から改めて御咎めを蒙るだらう、といふやうな風説さへ立つた。それらの流言蜚語は華山の耳にも入らずにはゐなかつた。華山は自分がさういふ惡評を蒙るのも道理だと考へた。彼は畫會の繪は三月分ばかり畫いたゞけで中止してしまつた。

明くれば天保十二年であつた。華山の一家の者は今年も淋しい元日を迎へた。

辛丑元日早起自汲盥、拜三家廬一進三辛盤、獻三壽盃、賀三慈親、慈親榮壽七十、予四十九、婦三十六、兒立十、諸七、女葛十六、闔家無故、誠天樂也、此日詩二首。

萬葉煙哀海嘯紅 投刺飛轡西又東  
滾々馬塵皆醉夢 今朝眞個迎春風

四十九年官道標 昨非不改恥二衛連

誰知樂有超人處 七十葦堂數架書

と華山は畫箋紙に書いて壁に貼つた。

其の年は一層淋しい生活を華山は送つた。其の筋の監視は益々嚴重になつて、何事につけても不愉快で不自由な思ひをした。近頃ではそれが爲めに訪問客も減少になつた。彼は、恚んな惨めな思ひをしてまでも餘命を食りたいとは思はなかつた。自分の生涯は、天保十年の正月迄で終つてしまつたのだと彼は考へてゐた。けれども、老母の事を思ふと、子としての孝養を一日でも長く盡したいと思つた。唯それだけだつた。

處が、彼は近頃思ひも付かなかつた風評を耳にした。それは三宅家の新藩主が、家督相續をして最早一年餘りにもなるのに、いまだに、役附きが出来ずに居るのは、臣下の中から華山のやうな罪人を出してゐる爲めであるといふ風説であつた。事實さういふ風評が、家中でも可成り尤もらしく傳へられてゐ

たのだつた。それを聞いた時はかりは、華山は胸を刺されるやうな心地がした。彼ははじめて最後の決意をしたのだつた。

併し、此の期に及んで、何か一枚畫き残さうと考へた。其の時彼の胸裡に湧いた感慨は、四十九年の人生の夢であつた。

彼は、有名な「盧生炊夢之圖」を描き上げた。

それから二日はかり経つた。朝のうちから、懇意にしてゐる南坊流の茶人奥田某といふ者が遊びに来て、世間咄しをしながら茶を飲んで、丁度時刻が來たので、一緒に晝飯を食べた。それから直ぐに華山は席を起つて、

「奥田さん一寸失禮する」

と言つて離れの方へ行つた。が、何時迄経つても戻つて來なかつた。妻のたか子が不思議に思つて見に行つた時には、華山は短刀を喉に突き立て、死んでゐた。たか子の叫び聲を聞いて母も其の場へ馳せて行つた。が、母は悴の死に態を見て、

「登、お前は何故腹を切らずに、喉を突いたりして、女のやうな死に方をしたのだ」と叱りながら、死體を抱き起した。

併し、よくく／＼検めて見ると、華山は先づはじめに腹を屠り、衣服の前を正しく合せた上で、改めて喉を突いてゐるのだつた。

「矢つ張りわたしの子だ——」

と、母は哀しい顔に満足さうな笑ひを浮べた。

それは天保十二年十月十一日であつた。

渡邊小華

華山に二男一女があつた。長男は立といひ、次男は諧と云つた。

諧は幼名を舜治と云ひ華山が自刃した時は七歳であつた。諧は幼より畫を好み、やゝ長じて後、梅山、半香に愛せられ、特に梅山に師事して、畫名を小華と號した。猶小華は經史を大橋訥庵に學び、詩は關根痴堂に質し、其の畫は山水花鳥を得意として、いづれも氣韻に富み、明治初期の南畫界に重きをなした。

彼は維新後廢藩置縣の際田原藩の大參事となつた。明治十五年上京して畫を以て門戸を張つたが、幾くもなく明治二十年腸窒扶斯に罹り、五十四歳で歿した。

田能村竹田

輒津の邂逅

竹田は、文化十一年の夏、大阪へ行つた。大阪では生玉の持明院に寄寓して、數箇月を送つた。持明院に宿るのは、是で二度目であつた。此の前來たのは文化四年だつたから、三十一歳の年である。其の年の暮彼は結婚して、結婚後の幾月かを郷里の家で暮したあとで、大阪へ漫遊したのだつた。

京攝の間には、彼の知己も尠くなかつた。京都には、莫逆の友小石元瑞も居れば、三十歳の時入門して詩學の師と仰いだ村瀬栲亭もまだ健在であつた。大阪には、岡田米山人が居た。矢張り其の頃から、彼は米山人の知遇を得て、屢々其の窓下に侍して教を受けた。米山人は竹田の畫を見るといつでも欣然として、

「私の衣鉢を後來傳へる者は足下ばかりだ」

と言ひ／＼した。

竹田は、それらの文人墨客と交際して悠々と日を暮したのだつた。

いつの間にか秋になつて、朝夕は衣を拂ふ風が膚に沁みるやうになつた。其の頃になると、竹田は、寂しい旅の寢醒めの床に、家郷を思ふのであつた。浮か／＼と暮らしてしまふ都門の生活を辭して、草



深い豊後の片田舎の村莊に歸臥して、靜かに詩想を練りたいやうな氣持になる。都に住む人の眼には、見るもいぶせき草の庵だけれども、彼に取つては其處が唯一の安息所である。

村家點々たる中に、竹林の蔭、細流に臨んでゐる我家で、妻が野菜を洗つてゐる姿が見え、其の傍らで嬉々として遊び戯れてゐる愛兒太一の面影が眼に映つたりする。

九月の初めに、竹田は大阪を發つて、便船に乗じて歸省の途に就いた。が、途中、備後の鞆津で下船して三島怡齋を訪ねて見ようと思ひ立つた。怡齋は鞆津の富豪で、詩文墨竹の心得があり、竹田は大阪で數回交際した仲だつた。傍ら、いつも船で素通りして海上からばかり望んでゐた鞆津の風光を、親しく觀賞してみたい氣持もあつた。

竹田が怡齋の家を訪ねると、怡齋は非常に喜んで迎へた。そして一別以來の挨拶が済むと直ぐに怡齋は言つた。

「大變好い折においで下すつた。實は兩三日前から山陽先生が宅へ來て居るのです。先生は確か、まだ山陽先生とはお近附きでなかつたやうに聞きましたが」

「掛け違つてつい面會致しません」

「それでは早速御紹介致します。先づ其の積りで、今回は御緩りと御逗留を願ひたいものです」

それから直ぐに山陽と竹田は、主人の紹介で顔を合せたのだつた。が、此の兩者は、顔を合せたのは今が初めてだが、お互に名前前から知つてゐた。それは、竹田の親友であるところの小石元瑞は、山陽に取つても亦無二の知己で、且一面恩人とも言ふべき人だつたので、二人は元瑞を通して間接に相互の人と爲りを知つてゐたのだつた。

小石元瑞は、京都の人だが、江戸へ出て大槻玄澤に學び、京都へ還つて蘭醫を開業して大に行はれた。彼は専門の醫學以外に、漢學も造詣が深く、詩文を善くし書に巧みであつた。大體風流文雅を好んで交遊頗る廣かつた。山陽が、文化八年の冬初めて京都へ出て來た時、徳崎小竹の紹介を以て、一番最初に訪問したのが小石元瑞であつた。元瑞は暫く山陽を自分の家に留めて置いて、逢ふ人毎に山陽を紹介した。さうして山陽の知人が一人二人と増して行つた頃を見計らつて、新町に借家をして山陽を其處へ移らせて、儒學教授の看板を掛けさせた。それが山陽の今日を成す第一歩だつた。

爾來僅か四年、三十五歳の今日迄、山陽の努力は非常なものだつた。其の頃京都には、儒學を以て門戸を張る錚々たる大家が十指に餘る程あつた。其の中へ、突然田舎から飛び出して來た山陽が肆を開いて、競争しようといふのは、寧ろ大膽に近い行爲だつた。が、彼は飽く迄も降らず、都門の一隅に旗幟を立て、それらの大家と覇を争つた。其の努力は酬いられ、僅かの間に名聲隆々として昇つた。彼の

塾は一日増しに賑かになつて來て、門前には書を索める者が踵をついで到るやうになつた。さうして志の一端を得た山陽は、今年の八月上旬京都を發し、五年振りで故郷廣島に歸山したのだつた。彼は久方振りで兩親の傍らに侍して、愉しい日を暮らした。山陽の歸省を聞いて集つて來る親戚、門人知友の人々が門前に市をなした。彼は其の應接に追がなない程だつた。さうして青年時代の種々の屈辱や不名誉を一朝にして雪ぎ去つて、今や得意の絶頂に達してゐた。廣島に二週間餘り滞在して山陽は歸東の途に就いた。途中各所で歓迎を受け、九月の中旬頃鞆津へ來たのだつた。

山陽も、鞆の地を踏むのは今度が初めてだつた。が、彼は久しい前から此の地に懐れてゐた。それは山陽が九歳の時だつた。彼は母に伴れて大阪へ行つたことがあつたが、其の時船が或港へ一泊した。海上から眺めると、屋根が鱗のやうに重なつて、海邊近い處には數層の高樓が參差として立つてゐた。そして邊りを海霧が、包んだり現はしたりしてゐた。「何といふ港だらう」とおもつて舟人に訊ねて見ると、

「此處が鞆だ」と舟人は答へた。

其の、九歳の時の思ひ出が、山陽の心からは何時になつても消えなかつた。遙か後になつてから、人から保命酒を贈られたことがあつた。そして、其の酒が鞆の名産であることを教へられた。黄色い透明

な其の酒を飲むと、山陽は九歳の時の思ひ出を色濃く眼前に髣髴させた。其の後は、保命酒を口に付ける毎に鞆を思ひ、なつかしく感じた。

山陽は今積年の其の望みを果して愉快に堪へられなかつた。怡齋の別荘は對潮樓と稱し山海の觀望を志にした。昨夜は舟遊觀月の宴を催した。月の光を盃に受けながら黄色くて甘い保命酒を飲む心持は得も云はれなかつた。

山陽は、小石元瑞から屢々竹田の噂を聞かされてゐた。小石は非常に竹田に傾倒して、其の詩畫を推稱するのみならず、竹田の人と爲りを稱揚して「人格第一等」だと云つて口を極めて褒めるのだつた。併し山陽はまだ竹田の詩畫を見たことがなかつた。だから彼は幾ら小石が竹田を賞讃しても、彼自身は只黙つて聽いてゐるばかりで、竹田といふ田舎畫師に就いてさう強く興味を惹かれはしなかつた。彼は非常に自信の強い男だつた。自分自らの信じた物に對つては常に最大級の賞讃を辭しない代りに、自分の知らない物に就いては、他人がどれ程聲を大きくして稱揚して聞かせたところで、素直にそれを受け入れるといふことはなかつた。

さういふ風だから、山陽は今竹田に逢つても、一箇の畫工として以上に餘り重く見てはゐなかつた。其の夜、怡齋の宅で小集が催された。山陽、竹田、それに菅茶山の弟の菅徴卿、其他土地の文

人數輩が參集した。さうして置酒高興、宴酣にして、各々畫を作り詩を題することになった。山陽は、保命酒に酔つて、顔を眞紅にして、肘を枕としてゴロリ横になつた。後年彼は九州旅行中に酒癖がついて遂に大酒家となつたけれども、此の時分までは寧ろ下戸に近かつた。まるで飲まないわけではないが、多くは保命酒のやうな甘い酒を喜んで飲んでゐた。其の大好きな保命酒の瓶が彼の前にだけ置かれてあつた。

山陽は、さうして肘枕で寢轉んだ儘、人々の揮毫する處を眺めてゐた。眺めてゐると云ふよりも寧ろ、態と見ない振りをしてゐると云ふ方が中つてゐるやうな態度だつた。さうした彼の態度は折々人に反感を起させるのだつた。「山陽は傲慢不遜の男だ」と方々で云はれてゐた。けれども山陽に云はせると、拙劣な繪だの愚劣な詩だのぬたくつてゐる處を、神妙に長まつて拜見してゐなければならんと云ふならば、それは恰も地獄の責苦である。況んやそれに對つて一々諛辭を呈するに於てをやだ。だから彼は大概御免を蒙つて寢轉んでしまふのである。

いろんな人が揮毫した後で、竹田が筆を執る番になつた。其の時になつても山陽は同じやうに寢轉んでゐた。竹田は紙を展べて山水を畫き出した。

山陽は寢轉んだ儘、じつとそちらを見遣つてゐた。竹田の描く畫の形が成るに従つて、山陽の眼光が

輝きを増した。

山陽は突然がばと飛び起きて、

「唐人、唐人、眞個に唐人だ！」と叫んだ。

一座の人々は眼をそばだて、山陽と竹田と二人を眺めた。竹田は洒然たる態度で筆を動かしてゐる。

山陽は沈黙して、襟を正して、竹田の揮毫を眺めてゐた。

竹田は、人々から索められると、幾枚も畫いた。

感激性の強い山陽は、其の後で竹田の手を執つて、

「今迄貴下に逢はなかつたことは、私に取つて損失だつた」と言つた。

其の翌日、二人は再會を契つて、東西に別れた。

遊 學

田能村家の遠祖田能村吉左衛門と云ふ人は、備前池田侯に仕へて祿千石を食んだ武士であつた。其の一子休庵と云ふ者が醫者になつて、豊後岡藩の侍醫となつた。休庵から四世の孫を碩庵と云つた。それ迄代々醫を以て仕へて來たのだつた。碩庵に二男あり、長を周助名は君明と云ふ。學を好み、藩の司業

淵野眞齋  
渡邊蓬島

と爲つたけれども、早く歿した。次男が竹田であつた。竹田は名は孝憲、字は君舜、幼名を磯吉と云ひ、長じて行藏と改稱した。彼は醫者の子だけれども、醫を好まなかつた。幼い時から非常に讀書が好きだつた。そして、天稟の詩才を有つてゐた。彼は中途で醫を捨て、専ら儒學に志した。經學の師は、同藩の儒者唐橋君山であつた。二十歳の年には熊本に遊んで、李紫溪に就いて學んだ。それと同時に、彼は、非常に繪が好きで、此の方にも天分が認められる處から、彼の親は、同藩の畫師淵野眞齋、渡邊蓬島の二人に就かせて、繪畫を學ばせた。

二十三歳の時、行藏は藩の儒員となつた。そして師唐橋君山、伊藤文藏等と共に豊後風土記を編纂することを藩から命ぜられた。享和元年二十五歳の時、君命に依つて君山と共に江戸へ出た。江戸では古屋昔陽に従つて、經史の學を専攻した。

其の頃江戸では、谷文晁が漸く全盛期に入り掛けてゐた。彼の名聲は隆々として江戸の畫壇を風靡して、其の勢ひ旭日昇天の觀があつた。文晁門下にあらずんば畫師にあらざるの趣を呈してゐた。そこで田舎出の竹田も、大勢に押されて、文晁に師事しようと思ひ立つた。彼は紹介を以て、束脩を入れて文晁の門人になつた。さうして、稽古日に其の家に出掛けた。すると、さしもの廣い家も門人で一杯になる程だつた。文晁は、所謂寫山樓なる畫室で、數多の門人環視の中にあつて、豪健無類の筆を揮つて

谷文晁

見せてゐた。其の有様を見ると、誰でも、畫師もこれ程になれば——と思はずにはゐられないのだつた。

けれども竹田は、文晁の畫風がどうも心に染まぬやうに感ぜられた。文晁の手腕は確かに一代に冠たるものであつた。さうして其の地位は、男子の事業としては壯快を極めてゐるが、併し眞の畫といふものが、あゝした華やかな生活の中から生れて來るものだらうか、どうだらうか、とも考へさせられた。彼自身の心持で云ふと、そも／＼畫師などといふものはもつと寂しい、孤獨の生活の中にあつて、そして自然や人間を靜かに觀照すべきものであるやうに考へられた。あれだけの筆力と、あれだけの素養を有し乍ら、文晁の畫の何處かに一點匠氣の消えずにゐるのは、彼の性格に由來することだらうか？ それともあの生活が彼を毒してゐるのだらうか……と竹田は考へて見た。

そんな風だから、彼は餘り文晁の家に通はなかつた。従つて文晁の方でも、其の一門人に對して特別の注意を拂つて見ることはなかつた。

其の年の十一月恩師唐澤君山が病死した。竹田は、翌享和二年の四月歸國した。其の後は専ら國誌編纂の事業に没頭して、國內を限なく旅行して調査を進めた。彼は獨力を以て先師の遺業を完成せしめやうといふ決心をしたのだつた。

其の仕事は翌享和三年に至つて完成した。竹田はそれを唐澤君山の名を以て刊行することにした。併し、由來困難なる出版事業は、一貧生に過ぎない竹田をして、千辛萬苦の勞を嘗めさせた。さうして文化元年に至つて、漸く其の著述を世に出すことが出来たのだつた。

彼の家は、元來非常に貧乏だつた。藩から受ける俸米といふのも僅かなものだつた。加ふるに藩其のものも甚だしく疲弊してゐた。豊後一國は小藩が割據して、各藩とも財政困難であつたが、わけても岡藩は近年政治が弛緩し、上下奢侈文弱に流れ、年々租税を増徴して漸く彌縫してゐる有様だつた。で、小祿の者では生活を維持することさへも困難だつた。

其の頃、彼の家庭に一つの悲劇が行はれた。それは彼の妻の離別問題だつた。其の妻は、菱屋某といふ町人の娘だが、非常な美人だつた。最初のうちは夫婦仲も睦しく、家庭も平和だつたが、それが永くは續かなかつた。其のわけは、彼女は富裕な町家に育つて来たために贅澤の習慣が付いてゐて、今俄かに貧乏な武士の家に嫁して来たからと云つても、どうしても其の習慣はぬけなかつた。そして彼女自身としても、町人の娘から武家に嫁付いたといふ欣びや誇りが、貧乏な生活の爲めに失はれてしまつて、現在の境遇に對して不満であつた。それが極端に舅姑の感情を損ねた。竹田も、妻に對する愛情はもつてゐても、其の無理解に對して憤るやうな場合も屢々あつた。

そんな風で、家庭に風波が立つた。そこで彼は妻を離別する決心をした。どれほど可愛い女房でも、生みの親には替へられぬと彼は言つた。かうして自分一人が無情な人間になつてしまふ方が、結局彼女の爲めにも幸福であらう……と彼は考へたのだつた。

妻の問題の外に、彼にはもう一つ苦痛があつた。それは永年の眼疾であつた。有らゆる療養の手を盡したが一向驗目が見えなかつた。讀書や著述に没頭するので、眼は益々悪くなるばかりだつた。

妻を離別した當座は、淋しさに堪へられぬやうなこともあつたが、同時に自由な、煩ひのない獨身生活の有難さを泌々と考へるやうなこともあつた。とにかく彼は勉強がよく出来た。

文化二年、竹田は京都へ遊學した。併し、學費が乏しいので非常に苦しかつた。其の學資は月に米一俵だつた。米一俵では暮しやうがなかつた。最初は市中に汚い間借りをして始めたが、間もなく財布の底をはたいてしまつた。そんな風だから、立派な師匠に就いたり、文人墨客を訪問したりといふことも出来なかつた。國を出る時紹介状を買つてある處などへも顔を出したいにも、手土産を買ふ金がないから出せなかつた。そのうちに或人の紹介で洛北の阿彌陀寺へ寄寓させて貰ふことになつた。此の寺は近世の慈雲律師の開いた所だが、當任の和尚も學問好きで、書物などは庫に一杯仕舞つてあるので、竹田は自由に其の書物を讀ませて貰ふことが出来た。そこで彼は節約のために一日の食事は二度に減じて、

漸く露命をつなぎながら苦學を續けることが出来た。其の傍ら方々の寺を廻つて古書畫を見せて貰ひ、それを縮寫したりして、畫の研究もした。其の時分、郷里の或人へ遣つた手紙に、まだ京都へ来て誰の處へも入門しないと云つて其の後で、

「當時の先生に一拜一起仕候。て機嫌取り申候よりは、有り合ひの書物にて、寂寞たる佛閣に高臥して、古人と尙友仕候方、宜敷と極め申候。」

など、書いたこともあつた。併し、それは彼の負け惜みに過ぎなかつた。矢張り師がなくては本當の學問は出来なかつた。當時、京都の學者の中で、彼が心から推服することの出来るのは村瀬栲亭一人だつた。そこで竹田は漸く金一分の束脩金を算段して栲亭の門に入つた。

村瀬栲亭

村瀬栲亭は京都の人で、秋田藩の儒臣となつた。彼は、博學洽文、詩文を以て一世に重んじられ、又書畫を善くした。讀書の暇には必ず古法帖を臨撫して、砑々として倦まなかつた。就中東坡の書を崇尚した。彼が書を作る場合には餘程特色があつた。先づ其の前日から一切家事を顧みないで、起居を慎み飲食を節し、室内を整頓し、筆硯を料理し、若い女子に墨を磨らせるのだつた。彼は人に語つて、墨を磨るには織い女子でなければ不可ないと云つてゐた。さうして置いて、翌日は早く起きて、早朝から書き始めて、終日手を休めずに書き續けて、晩方になつてまだ興が醒めなければ、最後に蘭竹などを畫いて、漸く筆を收めるといふ風だつた。

栲亭は直ぐ様竹田の非凡の才を認めて大いに優遇して呉れた。竹田は一年餘り栲亭に從學した後、郷里へ歸ることになつた。其の時栲亭は大煩ひをしたばかりで、まだ床も離れずにゐた。同じやうに竹田も其の頃非常に健康を害してゐた。餘りの苦學で體を痛めたのだつた。栲亭は心から竹田と別れることを惜んで、一詩を作つて餞けとした。

竹田莊の珍客

其の翌年、竹田は、白杵藩の安東氏の女を娶つた。此の二度目の妻は温良貞淑の婦人だつたので、竹田は以前のやうに家庭の紛紜に煩はされることはなくなつた。

妻は間もなく懐妊して、次ぎの年男子を生んだ。其の子は太一と名附けられた。文化八年の二月から竹田は又々京都へ上つた。彼は先づ村瀬栲亭を訪ねて久澗を叙し、或は皆川淇園を訪問して畫談を聴いたりした。小石元瑞と相識になつたのも此の頃の事だつた。

それから彼は更に紀州に遊んで、和歌山に野呂介石を訪問した。其の旅から竹田が故郷へ歸ると間もなく、藩内に一大騒動が持ち上つた。それは、此の年の冬、領内

の百姓が一揆を起して一時に蜂起したのだつた。其の頃岡藩の士風は悉く廢頽して、武藝學問に志す者は殆どなく、奢侈淫佚の風が全藩に漲つてゐた。藩の財政が困難になるに従つて、新法に次ぐに新法を以てして、只々苛斂誅求を事として一時を糊塗してゐた。だから農民の疲弊は極度に達して、怨嗟の聲が道路に満ちてゐた。其の積年の禍根が遂に爆發するに至つたのだつた。

百姓一揆は一時辛くも鎮壓することが出来たが、藩の有司は少しも弊政を改革しようとはしなかつた。それを見て竹田は深憂措くこと能はず、彼は遂に意を決して、長文の建白書を起草して藩主に上つた。藩主中川侯は、竹田の誠忠と才學とは十分に認めてゐたけれども、政治向の事に就いては、局外の彼の建言を直ちに採用することは出来ない事情もあつた。で、荏苒日を送つてゐるうち、翌文化九年の二月に至ると又もや一揆が蜂起した。茲に於て竹田は再度の建白書を上つた。其の建白書に於て、彼は藩政の禍根を露骨に指摘し、病弊を除き勤儉力行を勧め、學問の奨励が急務である所以を力説したのだつた。竹田の直諫は當路の人々の肺腑を刺す底のものがあつた爲めに、彼は反つて藩の老臣達から甚だしく睨まれた。折角の其の熱誠も、分外の差出口であると云はれて、却つて物議の種となつた。竹田の師友であるところの伊藤文藏は、壯年血氣の竹田が、直情徑行を以て國事に奔走するのを見て、彼の身に禍の降り来るべきことを畏れ、大いに其の非を咎めて深く訓戒するところがあつた。竹田も

漸く悟つて、以後決して政治に容喙しないことを伊藤に誓つた。

文化十年三月、竹田は病の故を以て馬廻 役兼由學館 頭取の勤務を辭任した。彼は今後の生涯を詩畫三昧の境に送るべき決心をしたのだつた。併し藩主は竹田の忠節を知つてゐたので、致仕の後も由學館 詩文總裁といふ役を興へて彼を優遇することを忘れなかつた。

前段の頼山陽と輒津で邂逅したのは、其の翌年のことであつた。

竹田が、二度目に山陽と逢つたのは、山陽が九州旅行の途次豊後の竹田町に来て竹田莊を訪問した時である。それは文政元年十月末であつた。

山陽は、其の年の二月 京都を發つて、中國を経て下關から九州に渡つた。豊前に入り、博多に足を停むること約一月、それから佐賀を通つて、長崎に着いたのは五月の末だつた。彼は此處で多くの人と交り、或は蘭船を見物し、或は支那人と交遊して、大いに見聞をひろめた。其の土地の特殊の人情風俗は、數多くの詩篇となつて後世に残された。長崎にあること約三ヶ月、肥後に向ひ、泊三天草洋一の詩を得て、熊本に入り、鹿兒島に赴き、再び肥後に戻つて、東肥街道を経て豊後に入つた。二重嶺を越え、阿蘇山の煙を望んで進んで九重嶺を越えて、十月二十三日の夕刻に岡城下に到着した。

山陽の來遊は前以て報ぜられてゐたので、其の日竹田は、十一歳の梓太一に人を附けて途中迄出迎を

させた。山陽は、長途の旅行で日焼けこそしてゐたが、少しも憔悴の色はなく、長刀を横へ、腰に酒を盛つた竹筒を提げて、颯爽として遣つて來た。

竹田莊では、主の竹田を初め藩内の二三の人々が、首を長くして待つてゐた。其處へ山陽は遣つて來ると直ぐ門先きで竹田の顔を見て莞爾と笑つて、それから太一の方を顧みて頭を撫で、遣りながら、「なか／＼寧馨兒ぢや、腫が清らかに澄んでゐる、必ず才があるでせう。：：だが、人間は寧ろ愚痴に限るな。愚なれば則ち貴く、痴なれば則ち富む、はッはッはッ」

太一は、竹田に取つては、天にも地にもたつた一人の子である。彼が太一を愛することはひと通りでなかつた。何處へ行くにも其の子を伴れて歩いた。其の命にも替へがたく思ふ太一を山陽が發めて呉れたのだから、竹田は嬉しかつた。其の晩の宴には、山陽、竹田のほかに、岡仲達、角田九華等が加はつた。山陽は盛んに飲み且つ談じた。九州の山川風物、文人墨客の品評、それから旅行談に花が咲いて、山陽は長崎で馴染んだ袖笑といふ妓の事をのりけ混りに話したりした。

竹田は、山陽の酒量があつてゐるのに一驚を喫した。先年輒で逢つた時、山陽は普通の酒は口に附けず甘い保命酒をチビリ／＼飲んで、それでも酔つて眞紅になつてゐた。其の事を思ひ出して竹田は不思議に感じた。

「貴下は何時の間に、そんなに酒量をお上げなすつたのです。此の前お目に掛つた時は餘り召し上らぬやうだつたが」と言ふと、

「今度の旅行中に覺えたのです。最初下關に逗留してゐた時、其の家の主が酒徒で、灘の「鶴」といふ酒が取つてあつて、それを飲ませられたが、勁い酒で臍まで通るやうな心地がした。それから味を覺えて、九州一圓飲んで廻つたので、今では片時も酒がなうては寂しうて暮されんやうになりました。京に歸つたら定めておかに叱られることであらうて、は／＼／＼」

「先生は九州では何處の景色が最もお気に入りでしたか」

と角田九華が尋ねると、

「九州では、櫻島の勝絶が冠たるものですね」

と言つて山陽は、櫻島の風景の談から、鹿兒島滞在中の出來事などを話した。

山陽は七日間竹田莊に滞在した。其の間一日として詩酒の遊びをしない日はなかつた。竹田は、何かな珍味を調理して山陽を饗應したいと思つても、田舎のことで鶏黍のほかに何物もないので、止むを得ず自家の園圃に栽培したところの蔬菜を取つては、客膳に供することが多かつた。山陽は、詩を賦して



芒鞋半破鬢飄蕭

迂路尋君不厭遙

海港方船成昨夢

林窓剪燭又今宵

園多閑地無租圃

屋倚荒山有祿樵

霜葉雨蔬留吾醉

行藏總付濁醪澆

山陽は物を粗末にすることを甚だしく嫌ふ人だったので、其の習ひが酒の上にも現はれて、一滴の酒と雖もこぼすことを嫌つた。それを見て岡仲達は「山陽愛酒如妻惜酒如金」と言つたくらゐだつた。山陽が腰に附けて來た竹筒は可成り古い物で、飴色に煤けていゝ澤が出てゐた。

「大變いゝ竹筒だが、何處でお手に入れたのです」と竹田が訊ねると、

「長崎の骨董屋で求めた」と山陽は答へた。

竹田は欲しくなつた。

「此の竹筒を私に呉れませんか」

「いや、それは困る。此の竹筒は私の唯一の伴侶だから、之に別れると大きに不自由をしなければならぬ」

竹田は一個の瓢を其處へ持つて來た。

「では、代りにこの瓢を差し上げるから、是非竹筒を私に下さる」

と言つた。其の瓢は竹田が多年秘藏してゐる物だつた。山陽は大變其の瓢が氣に入つて、

「いや是と交換なら結構。では、竹へ一筆書いて見ませうか」

さう言つて山陽は其の竹筒へ「會貯環津月。又籠霧島雲。虛山能許我」と、自分で刀を執つて彫り付けた。

竹田の家の前を細い溪流が流れてゐた。其の溪流の傍らに大きな銀杏の樹があつた。夕陽が斜めに照すと銀杏の葉が黄金のやうに彩られた。山陽はそれを見て、感傷的な眼付きをして、

「銀杏は美しいなあ。——茶山先生の家にも銀杏があつた。門を出ると直ぐ眼に附く處に此の樹があつて、枝が大層繁つてゐた。毎年秋の霜に逢ふと葉の色が急に美しくなつた。で、茶山先生の家を、黄葉夕陽村舎と云ふのですよ」と言つた。

山陽は十月二十九日の朝、日田郡へ向つて出發した。

無名の畫工

文政二年の秋、竹田は藩侯の駕に従つて江戸へ行つた。江戸へ到着してからは、文晁を初め舊識の人を訪問したり、宿に籠つてゐる間は著述に従事したりした。其の頃彼は「瓶花論」といふ物を書いて

みた。

文晁は、些かも元氣衰退の色なく、依然として江戸畫壇の中心人物であつた。竹田が寫山樓を訪問すると、文晁は喜んで賓客の禮を以て竹田をもてなした。そして、秘藏の金泥を割いて竹田に贈つた。貧乏な竹田は、未だ嘗て金泥を使つて繪を描いたことはないのので、大變喜んで貰つて歸つた。

其の頃のことだつた。或る日こと、竹田は淺草邊の裏町を歩いてみた。其の時、みすばらしい裏長屋の前を通り掛ると、一軒の家の内から何やら獻款くやうな聲と、男女の言ひ争ふやうな聲が漏れて來て彼の耳に這入つた。併し、單にそれだけのことなら竹田も素通りをしまふところだつたが、何氣なく聞いた其の話し聲の中に「大雅堂々々々」と繰り返して言つてゐる言葉が聞えたので、「はてな——」と思つて足を停めた。

そして、窓の側へ歩み寄つて聞くともしに内の話を立ち聞きした。

「全くお前の言ふ通り、わしは此の大雅堂を手離すことは、自分の身を切り取られるよりも辛い氣がする。が、今はさう言つてゐる場合ではない。かうしてゐれば俺達は遠からず餓死をしなければならぬ。どんな名畫も命には替へられぬから、手離す決心をしたのだ」と男の聲で言ふと、今度は女の聲で、

「だから、それ程大切な寶を賣り拂ふのはお止しなさいと妾が申すのです。さういふ物は、一度手離したら、二度と戻つてはまゐりません。併し、全く此の儘では、貴郎が仰しやる通りわたし達は餓死するよりほかはありません。ですから今も申したやうに、妾を勤め奉公に出して下さい。さうして幾許かお金が出来たら、貴郎も思ふ様に繪の修業をなさることが出来ませう。二人で餓死するのを待つよりは、其の方が賢いでは御座いませんか」

「否、そんな莫迦な事は出来ない。何處の國に女房を賣つて繪の稽古をする奴があるものか。まあ、後は何んとかなる。一時此の繪を賣り拂つて米屋や何かの借金拂ひをすることにしよう。心配しないで、それをこちらへ寄越すがいい」

「否え、いけません。之を賣つてしまつたら、貴郎は屹度後悔なさる時があります」

「後悔しても仕方がないではないか。大雅堂の幅を賣る代りにお前の體を賣つてしまつたなら、俺は猶更後悔しなければならぬのだ」

「貴郎はお氣が弱過ぎます。立派な畫家になる爲めには、女の一人や二人どうなつたとて構はぬといふ、強い心をお持ちなさいませ」

「それは無理だ。成る程俺に取つては、自分の命の次ぎに大切な物は繪だ。しかし、其の俺に取つては

大切な繪だけでも、それが誰にも同じやうに大切な物だとは思へない。自分一人の慾望の爲めに、罪もないお前の身を犠牲にすることは出来ない」

「では、どうあつても此の繪をお賣りにするんですか」

「差し當つて他に分別も工夫も附かぬから、惜しいけれども手離すよりほかに道はない」

「まあ——何といふ情ないことせう……」

さう言つて女は又もやさめんくと泣くのだった。

竹田は、思はず引き入れられて聞いてゐた。彼は、直ぐ様自身の苦學した時の辛苦を思ひ返した。彼は、繪畫といふ物は、畢竟するに人間の生活の中の一つの遊技であると思つてゐる。其の遊技が世の中へ現はれて来る爲めに、一面にはかうした悲劇が行はれてゐるのだと思ふと、不思議なやうでもあれば、また悲壯な氣持もするのである。

彼はふと氣が附いて、向うの角の酒屋へ行つて、酒を一升買つて來た。

「お頼み申す」

女房は慌て、涙を拭いて顔を出した。

「いらつしやいませ、どちら様でございますか」

「いや、手前は通り掛りの者ですが、折入つて御主人にお目に掛りたくて參上致しました」

「左様でございますか、では、穢くるしいところでございますが何卒お通り下さいませ」

上へ通つて見ると、六疊ばかりの間で、壁は剥げ、疊は破れて、見る影もない住居である。主といふのはまだ二十五六位の若い男である。何様ひどい貧乏暮したが、そこに繪筆だの繪の具皿だのが散らばつてゐるので、一見畫工であることは分る。

「これは初めて御意を得ます。拙者事は、只今御内儀迄申し入れた通り、通り掛りの者でございます。姓名も名乗らずぶしつけの推參、失禮の段は幾重にも御用捨を願ひます」

「これは、御念の入つた御挨拶で痛み入ります。して、御用向は」

「借、ほかでもありません。只今表で聞くとおなしに御夫婦の内証咄しを立ち聞き致しました。實は手前は遠國の者なれど、矢張り御主人と同癖の者で、我身に引き比べて思はず貰ひ泣きを致しました。併し、よく人間は七轉び八起きと申すが、殊に足下などはお若い體、望みはこれからでございます。只今の艱難辛苦もやがて笑ひ話になる時節もあります。決して物事を苦勞になされず、挽ます屈せずお遣りなされ。それから酒債などにお苦しみの様子、甚だ失禮だが、故に手前持ち合せの金子が少々有りますから、是で當座の凌ぎをお附けなさるが宜しい。又折よく持ち合せた酒もあります。これで愁を晴さうで

はありませんか。御内儀、無儀ながら爛の儀をお頼み申す」

と言つて竹田は金の包みと、一升徳利とを差し出した。

「何れのお方か存じませんが、お恥かしい處をお耳に入れて面目次第もござりません。御芳志は忝ら存じますが、併し申さば内輪の内證事、見ず知らずのお方に御迷惑を掛けては相済みませぬ。何卒此の儘お聞き流しに預り度う存じます」

「はてお堅い事を仰せられる。見ず知らずと申しても、足下と手前とは同じ道に遊ぶ者、相見互ひではありませんか。花の下に酌む盃は、通り掛りの者に獻しても厭とは申さぬもの、何の御斟酌が要り申さう。一獻やりながら御高説を拜聴致したい」

竹田の磊落な態度に引き込まれて、夫婦の者も其の上辭することが出来なくなつた。女房は酒の爛をして持ち出した。主人はなかく飲める口だつた。酒が廻つて来ると、今までの濕つぽい咄は忘れてしまつて、主客は旺んに畫論を交換した。其の談話に依つて竹田は主の畫工が大雅堂に傾倒してゐて、既に相當の力量を貯へてゐるらしいことを、想像することが出来た。

「時に御主人、手前は先刻も申す通り遠國の者ですが、斯の道に志して間もない頃、江戸へ參つて、一度は文晁の門に入りました。が、どういふものか私には文晁の畫風が心に染まなかつたので、餘り繁

繁も參らず間もなく歸國してしまひました。併し、各人の好みは別として、とにかく文晁は一代の巨匠であるには相違ない。世間では探幽以來の名手だと申すさうだが、規模の大なる點より申さば、それも決して過賞ではござるまい。足下も一應文晁の門に遊ばれては如何ですか。殊に江戸で畫名を成さうとする者に取つては、何彼と便宜な點もあらうといふもの、是は私の老婆心からお勧め申すのだが」

「お心添へ有難う存じます。私はまだ田舎から出て間がなく、江戸の模様もよく存じませぬので、文晁先生の雷名は承知して居りながら、未だに門を叩かずに居りましたのです。御教示に依つて漸く針路を見出したやうに存じます。早速文晁先生をお訪ねして見ることに致しませう」

「それがようござる。一借、突然參つて長居を致した。手前はこれでお暇申す」

「あゝいや、一寸お待ち下され。貴所様は遠國のお方と仰せられたが、何處の何と仰せられる御仁か、何卒お名前をお明し下さい。吾々夫婦の爲めには再生の恩人、此のまゝお話し申しては心残り御座います」

「はゝゝゝ、是しきの事に左様に仰しやられては痛み入ります。拙者は九州の者ですが、名前を名乗る程の者ではござらん。御縁もあらば又何處かで、お目に掛る時節もありませう。くれぐれも御夫婦睦じく、やがて御高名の現はれる日を、よそながらお待ち申す」

さう言つて竹田は振り切つて出てしまつた。

清 貧

高久 靄崖

其の無名の畫工は、高久靄崖であつた。

靄崖は下野國那須郡杉戸村の人。幼少の時から鹿沼で育つて、讀書を鈴木雲橋に受け、又畫を雪耕山人に就いて學んだ。雪耕山人は鹿沼の今宮神社の神官で、特に鮎を描くことの名人だつた。山人が歿した後靄崖は、大雅堂に私淑して、専心其の畫風を研究した。が、田舎に居ては畫名を揚げる見込みがないので夫婦つれ立つて江戸へ出て來たのであつた。

それから間もなく靄崖は、傳手を求めて文晁に入門した。文晁は直ぐ様靄崖の非凡の畫才に着眼して、平の門人扱ひをせず、客分として優遇した。其の頃文晁は人に逢ふとよく、

「私は近頃掘り出し物をした」と言ひくくした。

何を掘り出したのかと尋ねて見ると、それは靄崖の事であつた。それ位文晁は靄崖を重んじてゐた。

併し靄崖は、根本の畫風に於ては文晁と相容れなかつた。文晁が北宗に近い畫を描くのに対して、靄崖は何處迄も南方純正の文人畫の態度を執つて動かなかつた。文晁は包容力の大きい畫家であつたから、

自身の門人と雖も各々其の好む處に向はせ、決して自家の風を強ひるが如きことはなかつた。

靄崖は一家を成して、盛名噴々として遠近に聞えるやうになつた。彼は文晁門下の第一人者として推された。其の頃になつても、彼はその以前淺草の裏店に住まつて窮迫のどん底に沈んでゐた時、名前も名乗らずに這入つて來て自分の窮境を救つて呉れた、見ず知らずの人の事をば一日も忘れるといふことはなかつた。何時か一度は其の人に廻り逢つて、あの時の禮を述べたいものだ、常々夫婦で話し合つてゐた。

それから十五年の月日が経過した。靄崖はある年京都へ遊んだ。丁度其の時竹田も京都へ來てゐた。

靄崖は或人の紹介で竹田に逢つて見ようと思つて、其の假寓を訪問した。竹田は靄崖の顔を見るが否や、

「やあ靄崖先生、矢つ張りあなたであつたな」

と言つた。

「お、貴下は——」

「やれ／＼御無事でお目出度い。あの節は失禮致しました。其の後、高久靄崖といふ南宗畫家が、文晁門から出て賣り出したといふはなしを聞いて、多分あなただらうとは思つてゐた。が、縁があれば又か

うして逢へるものですか」

靄崖は萬感交々至つて口が利けなかつた。

竹田と靄崖は、互に滞在中親しく相往來した。靄崖は、畫を依頼する者があつても、容易に畫かなかつた。そして専ら古寺舊刹を廻つて、其の儲藏の古畫を借覽して臨摸するのを毎日の仕事にしてゐた。

折柄備後の某富豪が靄崖の名を聞いて、多額の揮毫料を條件にして畫を依頼して來たが、彼は矢つ張り畫かなかつた。處が、其の富豪の家に、明人郭完の双幅があるといふことを聞くと、靄崖は其の借覽を許して貰へるなら、揮毫してそれを畫料の代りにしようと申し出た。其の人は喜んで幅を送つて來た。靄崖は直ちにそれを臨摸して、約束通り數幅の自畫を作つて其の人に酬いた。

さういふ風だから、京都に滞在中も靄崖は非常に貧乏してゐた。交際する人とても竹田のほかには餘りなかつた。京都の畫家達は、靄崖を畏れて、大概の者が敬遠主義を取つてゐた。

或時、竹田が靄崖の寓所を訪れると、靄崖は喜んで迎へて、それから二人は夢中になつて畫談を闘はせてゐるうち、時刻がたつてお互に空腹を感じて來た。

「竹田先生は蕎麥は好きですか」靄崖は聞いた。

「蕎麥は大好物です」

「では私が蕎麥を注文して参りますから、少々お待ち下さい」

と言つて靄崖は出て行つたが、暫くして戻つて來て、

「實は先生、誠にお恥かしい次第ですが、只今蕎麥を注文に参りました處が、前の借錢が拂つてないので持つて來て呉れません。さういふわけで、折角蕎麥を御馳走しようと思つて存じましたが差し上げることが出来ません。併し、蕎麥屋が申すには、蕎麥湯なれば只で呉れると云ひましたので、何もないよりはと思つて蕎麥湯を買つて参りました。せめて是など飲んで一時を凌いでいたゞきたら存じます」

と靄崖は氣の毒さうに言つて、蕎麥湯を容れた器を客の前に進めるのだつた。

「いや結構です。早速頂戴致さう」

二人は蕎麥湯を啜つて、又話し續けた。

靄崖は江戸へ歸ると、藥研堀に居を構へ、其の家を晩成山房と號して、大いに南宗を唱道した。彼は常に語つて云つた。

「大雅南宗を草創し、雲泉之を討論した。更に之を潤色するに至つては、吾輩不似と雖も敢て之を他人に譲るものではない」

彼の畫は、氣韻風格の蒼古たる點に於て古名匠に愧ぢなかつた。

併し、不幸にして、天は彼に長い壽を藉さなかつた。天保十四年、靄崖は齡四十八で病を得て死んだ。其の頃でも靄崖は赤貧洗ふが如きものだったので、彼の妻は、其の葬式すらも出すことが出来なかつた。それは、靄崖の莫逆の友で、且つ第一の知己であつたところの大橋淡雅が、一人で引き受けて、立派に葬儀を営んだ。

竹田の清貧も靄崖に似寄つたものだつた。靄崖が陋巷に埋もれたる逸士であれば、竹田は田園に隠れたる幽士であつた。金錢に淡泊で貧苦の中に晏如たるものに至つては、全く同じ性格であつた。

竹田の畫名は、京攝の間では識者に推重されてゐたけれども、彼の故郷の地方では、極く少數の人のほかには彼が其の様に偉大な畫家であることを認めてゐる者はなかつた。

竹田は、文晁から贈られた金泥を使用して一度金碧山水を畫きたいと思つてゐたが、絹本を畫く機会がないので、久しく其の望みを果さずゐた。すると、其の頃土地に或富豪があつて、竹田は屢々其の家に出入してゐたので、彼は自身の希望を話して「是非絹本を一つ畫かせて貰ひたい」と言つて頼み込んだ。處が富豪のはうでは竹田を大した繪かきとは思つてゐないので、絹本などは勿體ないと言つて、てんで耳を藉して呉れないのだ。處が、其の後のこと或日竹田は其の家に行つてゐて、午睡をした時寢言にまで同じ事を言つたので、富豪も遂に心を動かされて、彼の希望を容れて遣ることになつた。竹田

は勇み立つて、金泥を用ひて四季山水圖を製作した。

また恚んな事もあつた。

其の頃別府に煙草屋といふ富裕な商家があつた。竹田は其の家の主人と懇意で、度び／＼行つて泊つた。主人は荒金吳石と云つて、俳諧が好きで、田舎では宗匠株だつた。或時も竹田が其の家へ行くと、主の吳石が、

「竹田先生、私は先達で長崎から極く上等の畫箋紙を取り寄せましたから、お目に掛けませうか」と言つた。

「是非拜見」

と竹田が答へると、主は秘藏の畫箋紙を持つて來て見せた。それは幅一間長さ二間の、舶來の頗る上質の大畫箋紙だつた。竹田はそれを見ると、其の上等の紙へ畫いて見たくなつた。

「成る程是は珍しい紙だ——吳石さん、私に一つ此の紙へ畫かして呉れませんか」

すると吳石は驚いたやうな顔をして、

「それは困ります。私も漸う手に入れた紙ですからね。實は、此の紙を用意して置いて、誰か名高い先生が漫遊して來たら畫いて貰はうと思つてゐるところです」

「誰かに畫かせるくらゐなら、私に畫かせたつて同じことせう」  
「ハ、ン、さうはいきませんや。貴下にお頼みする位なら、正直なはなしが、秋阜にでも畫かせたはうが増しだからね」

と、主人は冗談半分だけれどもさう言つてゐて、どうしても竹田に畫かせようとは言はなかつた。其の頃別府に津田秋阜といふ田舎畫工があつた。

で、竹田は、其の事は斷念して別府を去つたが、どうもあの「大畫箋紙」の事を思ひ出す度に描きたくて堪らなかつた。あの一間に二間の大紙へ一杯の山水を畫いたらどんなに好い氣持だらうと考へた。彼は馬關に滞在中、吳石に手紙を出して、例の大畫箋紙のことを言つて遣つた。すると吳石も竹田の熱心に感じたと思つて、

「御申越しの畫箋紙の事は正に承諾した。此の次來府せられたならば揮毫を御依頼致さう」

といふ返事を寄越した。竹田は大喜びで、それから常に其の大紙へ揮毫すべき山水の構圖を考へてゐた。日を経て彼は別府へ再遊した。處が、煙草屋の主は、竹田に畫かせることを承諾したものゝ、一度に全紙を使つてしまふことが惜しくて、それを幾つかに裁つて、其の一枚に畫かせることにした。

竹田は折角練りに練つた構圖を畫くことが出来なくなつたので大いに失望したが、改めてそれへ極溪

山水の圖を畫いた。描き了つて彼は筆を投じて、

「全紙ならば奇抜な構圖があつたが、二尺内外の小幅では、どうしても平凡になつてしまふ」

と言つて嘆息した。

竹田の貧窮は常に甚だしかつた。或時、彼は急に大阪へ行かうと思つたが、旅費がなかつた。そこで府内（大分町）へ出掛けて行つて、其の土地で八人衆と呼ばれてゐる某といふ豪家へ駆け込んで、事情を話し、山水花鳥を一枚二分づゝで買つて貰つて漸く旅費をこしらへた。其の後も竹田は急に金の要る事が出来ると、府内へ飛んで行つては一枚二分宛で買つて貰つた。

其の時々描いた畫は、後世になると、二分竹田、又は駆け込み竹田と稱へて、數千金の價を生じた。

### 水西莊の交遊

文政三年卯月二十一日、竹田は藩侯の駕に扈從して江戸表を發して歸國の途についた。そして翌月二十日に岡城に歸着した。竹田は、其の途中の見聞を誌して「陪駕日誌」を書いた。

同四年の秋には、伴の太一を伴れて犬飼に遊び、更に翌年は杵築に遊んだ。其の時竹田は杵築の客舎から、海物を寫生し、詩を題して遙かに京都の頼山陽に寄せた。山陽は直ちに和韻して贈り返した。其



の年高橋草坪が入門した。

文政六年の春には、太一を伴れて京都へ上る目的で、先づ尾道へ行き、それから大阪へ行つた。すると偶然にも大阪で山陽に出逢つた。山陽は伊丹に遊んで歸る途中だつた。兩者は互に久闊を叙して喜び合つた。

竹田は數日大阪に滞在した後入浴した。

當座は小石元瑞の家に泊つてゐたが、間もなく愛宕山の雙林寺に寄寓することになつた。雙林寺の住職月峯和尚は、風流の人で、詩畫を善くし、文人墨客と交遊して、竹田とも豫てから相識の間だつたので欣んで自分の寺へ迎へたのであつた。すると間もなく國元から門人の草坪と、豐水の二人が後を慕つて上京して來た。竹田は、平常から太一を盲目的に愛してゐて、片時も傍らを離すといふことはなく、旅行に出る時も大概一緒に伴れ歩くといふ有様だつたが、今度京都へ太一を伴れて來たについては、別に目的があるのだつた。それは太一に小石元瑞の薰陶を受けさせたいと思つたからだつた。太一はもう十六歳になつてゐた。

竹田が、一番信頼してゐるのは小石元瑞だつた。元瑞の方でも竹田には心服してゐた。二人は眞の知己であつた。そこで二人は相談の上、所謂子を換へて教へるといふので、太一を元瑞に教育させ、元瑞

の子の中道といふ者に竹田が學問を仕込むことになつた。中道をば竹田が手許に預り、太一は毎日雙林寺から堀川の小石の家へ通學させた。

竹田は、折り／＼山陽をも訪問して、時には其の家に泊り込むこともあつた。山陽は其の前年三木に新居を構へて、名づけて水西莊と稱した。其處は、叡山を仰ぎ、鴨川に臨み、嵐光水色、檻外に浮動して、心ゆくばかり閑雅な住居だ。庭中に一小草堂を建て、これを「山紫水明處」と呼んで、山陽は其の内で悠々著述に従事した。九州旅行前後までの山陽の名前はまだ／＼小さかつたが、此の頃から彼の名は俄然として天下に震ふやうになつてゐた。

山陽は竹田が行くと非常に喜んで、他の客を謝絶して、二人きりで對坐して、雜談をしたり詩作をし合つたりして楽しんだ。夜になると、祇園の妓を二三人位よんで酒の興を助けさせたりした。

ある時、竹田は幾日もつゞけて水西莊に泊つて日を暮したことがあつた。すると一朝のこと、山陽は早起きをして、書齋を掃除し、花を挿し香を焚き、床に吳春坡の山水の幅を掛け、自分で鴨川の水を汲んで来てそれを古い甕に貯へ、それから硯を洗ひ、墨を磨り、紙筆を展べ、其の他一切の道具を整頓した。彼はそれだけの事を全部自分でして、門人にも手を付けさせなかつた。さうして、すつかり整つた處で、竹田を其の室へ招いて、

「御覽下さい。今朝は此の通り用意が出来たから、そこで一つ私の爲めに書いて頂きたいものです」と山陽は言つた。

「承知しました。畫きませう」

竹田は即座に筆を執つて、白描の蘭竹、没骨の牡丹、それから草筆の水仙梅花、と三枚の畫を作つた。

竹田は近頃體の具合が悪くて小石元瑞の診察を受けてゐた。が、愛宕山から堀川迄は随分遠方である。彼ばかりでなく、太一も、日々其の道を往復するので可成り疲れてしまつて、歸つて來ても讀書どころではなかつた。「是ではいけない」と竹田は考へたが、小石の方でも、其の事を心配して、近くへ越して來てはどうかと言つた。竹田は、愛宕山の風景が氣に入つてゐたので、其處を捨てゝ去るのは惜しかつたけれども、已むを得ず轉居することにした。すると、堀川の東の外れで小川の夷川下ルといふ處に、恰好の家が見附かつたので、悴と門人を伴れてそちらへ引き移つた。其の家は伊藤東涯の舊宅の直ぐ側だつた。そして、北隣りが物集長兵衛と云つて、京都では名高い舊家で、且つ有力な人だつた。其の人が一切世話をして呉れた。長兵衛といふ人は古墨を愛して、方干魯だとか程君房だとか云ふやうな名墨を澤山蒐めて有つてゐた。其の家には書籍も澤山あつた。極く好人物で、小石とは素々親しい仲だ

つた。竹田は大變便宜を得た。

七夕祭りの夜竹田が獨りで三條の橋の邊りを歩いてゐると、向うから山陽がやつて來て、橋の上ではつたり逢つた。

「どちらへ」

「いや、ぶら／＼歩いてゐるのです。貴下は何處からのお歸りです」

「今晚は木米老人を訪問して、今迄話し込んで來たのです。どうもあの老人は何時逢つても談話が豊富で面白い」

と山陽は言つた。

陶工木米は名は八十八、木屋といふ屋號であつた。因つて木米と號した。鴨川の東、大和橋の北に住まつてゐた。彼は非常に多藝で、畫も善くすれば、茶道にも長けてゐた。専門の製陶の技に至つては精妙古今無類であつた。就中、古代の物を摸することに妙を得て、宋明の諸窯を模倣した物などに至つては眞物との間に少しも相違がなかつた。日本の青磁は、彼が初めて其の法を開いた。

竹田も木米とは頗る親交があつた。竹田が初めて木米の家を訪ねたのは文化の頃だつた。其の家は非常に狭くて、鴨川の上突き出して建てゝあつた。流水が潺湲として家の下に響いてゐた。其の時木米

は自分で川の水を汲んで、茶をいれてくれた。其の時竹田が一絶を作つて主に示すと、木米は大いに竹田の詩才を賞して、それから親しく交はるやうになつた。

山陽は頗る木米に傾倒してゐた。彼はかう言つた。

「我天下の書讀まざるなく、天下の事記せざるなし。而して翁よく吾が未讀の書を読み、又吾が未記の事を記す」

竹田は、自分の畫中の知己と稱する者が天下に二人ある。即ち木米と山陽とが是であるといつた。

山陽は、竹田の顔を見たので、此の儘別れるのも曲がないと、

「牽牛織女光猶闇、同躡胡床此夜情」

と言つて、河原の涼み臺に上つて夜が更ける迄語り合つた。

置 炬 燵

仲秋十六夜の晩である。其の時も竹田はたった一人で、鴨川べりを歩いてゐた。すると、或旗亭の二階から、

「竹田はん、竹田はん」

梅花雙鶴圖



田能村竹田筆

と呼ぶ者があるので、見上げると、數多の藝子や舞子が、欄干に凭れて手招きをしてゐる。併し、知つた顔もないので、人違ひであらうと思つて、さつさと歩き出すと、後から襦袢をからけて庭下駄を穿いて一人の藝子が追ひ掛けて来て、

「竹田はん、あんなに皆が呼んでゐますがな」と言ふ。

「わしは竹田ぢやが、こんな處に知り合ひはない。人違ひだらう」

「いえ、人違ひやおへん。さあ、お待ちやよつて、早うおいでやす」

「これ、何をする」

と言つても構はず、藝子は竹田の手を捉へて無理矢理引つ張つて行つた。仕方がないから隨つて行くと、川に臨んだ眺めのよい座敷で、はや杯盤狼藉たる中に、數多の藝子舞子が忽ちぐるりと彼を取り巻いて、下へも置かず款待する。而も一座は女ばかりで、一人の客の姿も見えない。竹田は狐につまづれたやうな顔をして、

「一體是はどうしたといふのだ。誰が俺を呼んだのだ」

「そないな事どうでも構へんがな。さあ一つおあがりやす」

「いや構はぬことはない。一面識もない座敷で酒の馳走になる理由はない。それとも誰か知つてゐる人

でも来てゐるのか」

「ほー、ほー、野暮な事お言ひやすな。わて達みんなよう知つてまんが」

「いや知らぬ。逢つたこともない者が知つてゐる道理はない」

すると、老妓の一人が、聲を張り上げて、

「天下誰人不識君」と、朗々と吟じ出した。

「何と——」

竹田は呆氣に取られた。

「天下誰人不識君——」

次ぎの間から大勢で聲を揃へて吟じ出した。そして襖を明けて出て来たのは、山陽、春琴、月峯の三名であつた。一同大笑ひして、それから飲み初めた。

「今夜は一つ芝居をやらうではないか」

と山陽が云ひ出した。

「面白、やらう」

と春琴が直ぐに賛成した。

月峯と竹田も仕方ないので役者になつた。藝子共が連中見物といふことで、本式の衣裳小道具を借りて来て、まさに幕を明けようとした處へ、折あしく市中監察の役人がやつて来て、掟に背くとあつて差し止められた上、大いに小言を頂戴した。一同は興が醒めて、其の藝子達を連れて三本木の清輝樓へ行つて、飲み直すことになつた。今度は藝子に三味線も弾かせず風流な遊びをした。

其の時藝子達が、繪を描いて呉れと言つて、扇面など差し出した。竹田は先刻山陽が鬘を付けて顔を拵へた態が、狸のやうで可笑しかつたのを思ひ出して、一人の藝子の扇面へ狸を描いた。すると山陽は自分の事とは氣が附かず「此の狸は上出来だ」と云つて、それへ贊を書いた。女達は後ろを向いてクスクス笑つた。

山陽と竹田との交遊は益々親密になつて行つた。山陽が竹田の詩畫と人格とに傾倒したやうに、竹田もまた山陽の博學と識見の卓抜なるに推服して、彼を以て無二の知己とした。會つて竹田は自畫に題する語の中に

「予資性迂濶、僻愛繪事。苦辛從事殆五十歲、這裡所レ得之消息、知者唯山陽一人、故平生稱爲三畫中知己第一」

と云つたのも、決して一時の諛辭ではなかつた。竹田は決して山陽に屈しはしなかつた。

竹田は、或時松本醉古に依囑されて、畫帖に揮毫して「亦一樂帖」とそれに題した。そして醉古に渡さうと思つてゐる時に山陽が來たので、出して見せると、山陽は一見して、

「是は傑作だ。是は僕が貰ふ」と言つた。

「それは困る。醉古に頼まれて描いたのだから」

「醉古には何か描いて遣れば宜いさ。とにかく是は僕が貰つた」

「ほんとに困る。醉古が憤るよ」

「憤つたつて構はんさ」

山陽はそれを持つて歸つてしまつて、自分で其の後へ跋を書いて「奪二人有爲己有亦一樂」と記して、喜んでゐた。醉古は果して大いに憤つた。

「山陽は怪しからん男だ。私が行つて談判して、取り戻して來る」

と言ふと、竹田は笑つて、

「いや、貴下にはもつと面白い物を描いて差し上げるから、捨て置きなさんか」

と言つて留めて、更に「亦復一樂帖」と題して、前よりも數等意匠を凝らした畫を作つた。

丁度花どきで、山陽は二三の人と知恩院へ行つて花見をしてゐた。酒宴の半ばへ竹田がやつて來た。

「宜い處へ來て呉れた」と山陽は喜んだ。

「山陽先生、又恁んな物が出來たから、お目に掛けませう」

と言つて、竹田は懐から畫帖を出した。

「今度のは誰に遣るんだね」

「松本醉古に遣る爲めに描いたのです。此の前足下に横取りされた故、その代りに描いたのだ」

山陽は畫帖を開いて見て、

「うん、是は名作だ」

と言つた。そして凝つと見てゐるうちに、山陽は「こいつも一つ横取りして遣らう」と考へた。が併し、今度竹田も油断がなかつた。其の色が山陽の眉間に現はれた瞬間、竹田は素速く畫帖を取り上げて懐ろへ入れてしまつた。

「はゝゝゝゝ」

と竹田は笑つた。

山陽も、仕方がないので苦笑ひをした。

竹田が餘り永く京都に居るので、郷里の親友伊藤喜一郎といふ人が書面を寄越して「定めて都で美し

花でも手に入れたのだらう」と云つて冷やかして來た。それに對して竹田は、自身の品行方正であることを縷々辯解して、

「有頼山陽贈予之詩、今掲結一句爲證曰、書册一囊茶一鼎、東山不醉紅裙。一書賈朝夕往來、紅裙翠袖は不足動レ情候へども、扱々書物はほしくなり困り申候」

と御丁寧に頼山陽まで引き合ひに出して、身の潔白を證明した。が、實は山陽等と交遊して花街狹斜の巷に出入する機會が重なる毎に、此の田園の老畫師でも、都の婦女の濃粧盛飾に何時となく心を動かすやうになつてしまつた。

竹田は淨瑠璃が好きだつた。酔うて陶然となると、自慢の喉を鳴らして淨瑠璃を唱つた。三味線も心得てゐた。其の頃祇園に飛珊と呼ぶ名妓があつた。一日竹田は、山陽社中の誰彼と鴨漕の一樓に會した時、初めて飛珊を聘んでその歌を聽いた。飛珊は浮川竹に育つた女ではあるけれど、多少文字もあり、風流を解し才氣流るゝが如きものがあつた。田舎者の竹田も飛珊に對しては少からず心を動かした。其の席で竹田は、本調子の「おきこたつ」といふ歌曲を作つて飛珊に與へた。それが縁となり、竹田と飛珊との間には情事が成り立つたのである。

しかし、それから間もなく竹田は歸國しなくてはならなかつた。歸國の前に竹田はこんな手紙を飛珊

に贈つた。

十三日朝かきそへ

十六日立にきわめ申候。おきこたつは本調子にて、もはや手がつき候哉。

きのふはわけてせわしきお日からのよしに、わざとの御文、ゆふべは殘燈の影にて、くりかへしくよみあかし候。あさましの田舎人を、かくあはれと見給ふは、うれしきやうにて、なか／＼かなしくおぼえてすゞろになみだこぼれ候。氣のあうたどうし、ひざとひざとすりあはせかたらふは、をのこだにたぐひなきことにこそ侍ふを、かゝる打とけたる御ことばをうけ給はらんとは、夢にだも思はずかし。このたびきふに國に參り候も、又々のぼり申す心ぐみゆへ、せひことしのうちにのぼりに花を見月をながめ、歌よみ酒のみ御あそび申さんと、今よりのしみ申候。此ごろの文句のはしに申上候やうに、此世はあだのかりまくら、思ふまゝにならぬは常のならひに候へば、たゞ御心やすらかに御わたり候へかし。御やまひのかさなり候はんかと、そののみ御あんじ申上候。古歌にも、

命あらばあふよもあらん世の中になどしぬばかり思ふころぞ

とにかく御身を御大事になされ候やうに存入候。又々なにより品の品ども御おくりくだされ候。色紙もいろいろとうつろふいろにそめなされ、御うつりがさへ、いと身にしみておぼえ候。御くわしも、須磨明石なぞいへるおもしろき浦々にたべ可申候。御歌はおせわしき内にも、かならずすて給はぬやうにと存候。よき便りには御見せ被下候へかし。申上度事は山々なれども、

思ふこところの内このしおきて又逢ふまでのなくさめにせむ  
なにもめでたく、かしく。

むつまじき月十一日

なにぞあげ度と存じ候へども、しかるべき品もなし。朝な夕なに手なれ候て、あさましきまでによこれ候へども、御ねざめの枕の上のときにと、金葉集一部、筆者極添へ上候。

夢に見る人はあやなし春の夜のおぼる月よりなほおぼるにて

今一度するがらの火でおかほも見えし、御しらべの聲もきいたいなア、なんとせうしたつとみ。今までかけてあるさみせんのを、ちよとはづして御もらひ申上度、あたらしきはどこにもあり、手なれたがほし。

竹田の詩畫

竹田は初め畫を岡藩の渡邊蓬島と淵野眞齋に就いて學んだ。眞齋は名は世龍、字は玉麟、權園と號した。江戸で渡邊玄對に學び、岡藩の畫員となつた。豊後の南宗畫は此の人から創まつたのだつた。竹田は、此の二人に就いて六法を學び、其の後は、江戸へ出て文晁の門に遊び、大阪の浦上玉堂、岡田米山人、京都の皆川洪園、村瀬栲亭、紀州の野呂介石……と當時名のある文人畫の大家は餘す處なく歴訪して指教を受けた。此の外に彼は土佐、狩野の風に至るまで手に任せて摸寫した。元明清諸家の筆法を研究撫仿したことは勿論である。さうして竹田は一番最後に、明の四大家の一人王淑明に私淑するに及んで、其處に初めて自己安住の境地を發見するに至つたのだ。

竹田も、他の一般の文人畫家がさうであるやうに、山水が主であつたが、人物花鳥も描いた。彼が三十四歳の時の作である「明皇觀女樂圖」は、未だ竹田の特徴を發揮したものではなかつたけれども、濃彩精緻にして絶えて浮薄の氣なく、世に稀なる名畫として後世に残つた。

天保三年、竹田は藩侯の命に依つて、「華陽歸馬」「桃林放牛」の二圖を畫いて獻じた。それは彼の畢生の傑作であつた。



竹田の畫は、南畫の神髓であるところの、氣韻生動が生命であつた。筆墨は精神の映する處、精神にして見るべくんば、筆墨は筆跡のみといふのが、所謂文人畫の主眼であつた。胸中萬卷の書あり、深遠の意おのづから現はれて素素の上に躍るやうな畫を、彼等は理想とした。竹田の畫の妙所も其處にある。彼は非常な讀書家で、和漢の有らゆる書を涉獵して讀破することを終生やめなかつた。

竹田の畫は、決して巧妙なものではない。寧ろ彼自身拙を以て任じてゐたからだ。併しそれは、後世の南畫家が、徒らに墨を飛ばして拙を誇るが如きものではなかつた。拙なるが故に、竹田は容易に畫かなかつた。彼は畫を作る時には必ず朽筆を用ひて下圖を取つた。それが、公衆の前で、いさゝかの合作をする時でも、必ず別室に退き、一々朽筆を用ひて然る後に畫くのだつた。勿論興が到らなければ圖案も作らず、意が十分に熟さぬ間は筆を執らなかつた。だから、三年も五年も十年も経つても、一つの畫題が描けずにあるやうなことがあつたり、或は、一つの遠山を描き入れるだけでも、意匠を求めて容易に筆を下さないやうなことが屢々あつた。所謂一夕に嘉陵江を描かずして、五日に一水を畫くの類であつた。

緒方竹外

肥後の人緒方竹外は、竹田の門人である。竹外が初めて竹田の許へ教を乞ひに来た時、「試しに先づ畫いて御覽なさい。私が觀て居るから」と竹田が言つた。

「承知しました」

と竹外は答へて、紙に向つたが、彼は自身の筆力を見せようと思ふので、筆を把るが否や、其の駛きこと電の如く、瞬間にして描き上げた。すると竹田は、

「足下は吾徒でない。形容畫史である。紙は筆を受け、筆は墨に和し、三者が相合して初めて畫が成り立つのである」と言つた。

そこで竹外は些か悟る所があつて、もう一枚畫いて見た。今度は行筆が稍々緩になつた。「宜しい、其の分なら見込みがある」

と言つて、竹田は初めて入門を許した。

或人が、竹田に畫を依頼したところが、久しい間出来なかつた。度び／＼督促をすると、漸く出来上つたと言つて贈り届けて來た畫を見ると、たゞ草を幾つか描いてあるばかりだつた。其の人は不平で、「是位な物を描いて呉れるなら、何もあんなに永く待たせるにも及ぶまいに」と言つた。

竹田はそれを聞くと、其の人を自分の家へ招んで、

「私はあの畫を描く爲めに、いろ／＼と苦心してゐるのです。どうか之を御覽下さい」と言つて、水に浸した椎茸を、大きな籠に溢れるほど入れたのを持ち出して來て見せたので、其の人

も初めて驚嘆して、厚く禮を述べて歸つた。

竹田の畫に對する熱心には時々人が駭かされた。小石元瑞の宅には、竹田は上京する毎に泊るのが例であつたが、小石の宅に居ても、晝間は晝作をしたり、人に會つたりして、夜は二三の人々と詩酒歡娛して、醉後に主人と床を並べて睡りにつく。すると夜半に呻くやうな聲がするので、小石は夢を破られて飛び起きて聞いてゐると、それは竹田が、半醒半睡で、晝間晝いたところの題語を口にしてゐるのだつた。それが毎度のことなので、小石は、

「どうも君と一緒に寝ると、寢言が喧ましいので閉口だ」と言つた。

天保三年に藩主中川侯から「華陽歸馬」、「桃林放牛」の二圖を命ぜられた時には、竹田は竹田町から二三里隔つた惠良の原といふ處の牧場へ毎日のやうに通つて行つて、牛馬放遊の狀を寫生して來て、やがてそれを絹に描いて見たが、まだ意に充たないところがあつた。で、又もや牧場へ通つて、一層研究をして、十分悟る處があつてから、再び筆を執つて描き上げたのだつた。

竹田の畫は、神韻縹渺として餘りに高尚に過ぎるので、俗畫を喜ぶ世人の觀賞には適しなかつた。或年別府に滞在してゐた時、費用に宛てようと思つて、半切の紙本に、花卉、竹石などを十枚ばかり畫いて人を頼んでそれを一枚一朱づゝに賣らせようとした。處が、頼まれた人は其の繪を持ち歩いて終ひに

は豊前地方迄も行つたけれども、漸う二三枚賣つたばかりで残りを持つて歸つて來てしまつた。そして言ふことには、

「何分先生の繪は買手がありません。併しお氣の毒ですから残りの分は私が貰ひます」

と言つて懐中から錢を出すと、竹田は手を揮つて、

「否々、それには及びません。残りは貴下上げるから保存して置きなさい。百年も経てば價が出るかも知れないから」

「先生、私は百年はとも生きられません」

と言つて、大笑ひになつた。

日田で晝畫會があつた時、竹田も出席したが、竹田がかすれ筆で徐々として描いて居るのを見て、

「あの晝工は墨を澤山に磨らず、少しづつ磨つて、乾いた筆でそつとなすつてゐるところを見ると、餘程の吝嗇家に相違ない」

と言つて、依頼する人が殆どなかつた。

竹田は或時自畫に題して「我畫在ニ自娛、不在レ使ニ人娛」と曰つた。彼の畫の眞意はまさしく其處にあつた。傳へて曰ふ、倪雲林、一日燈下に竹樹を作り、釋然自得した。曉に起きて昨夜作る處の

畫を展見すれば、全く竹に似てゐない。雲林笑つて曰く、全不似處、不容易到一耳と。それは同じく竹田の心境でもあつた。

古來の南畫家を通じて、竹田のやうに、詩畫書三つともに能くした者は我國にはない。

竹田の後半生は全く詩畫三昧の境地であつた。

彼の詩は即ち畫であり、畫は直ちに詩であつた。彼の詩は、其の畫と同じやうな軌道を通つて來た。彼の少壯時代の畫に凡らゆる流派の影響が現はれてゐたやうに、其の詩も中年頃迄は、樂天や袁王や東坡や小杜や、それらの臭味が隨所に現はれて、霸氣横溢するものがあつた。が、文政以後、初めて詩畫相調和して、神韻游動の幽趣を現はすやうになつた。

竹田は、嘗て門人高橋草坪に落款の法を訓へて謂つた。

「元の以前は落款といふ物に重きを置かなかつたが、倪雲林、文衡山、沈石田、陳白楊等の時代から、それが畫圖のうちの重要なものになつて來た。彼等の字は餘りに遒勁である爲めに時には畫位を侵すこともあるが、それが反つて奇趣を添へてゐる。一幅の中には必ず天然に落款を容るべき妙所があるのだ。若し其の位置を失へば、則ち全局を傷けることになるのである」

草坪は竹田門下で一頭地を抜いた秀才だつた。が、或る時頼山陽が草坪に向つて、

「足下の筆は已に十分だが、但書卷の氣に乏しい」と言つた。

草坪は大いに悟る處があつて、其の後は毎日の日課に、作詩十首、讀書若干、習字一千字と極めて、必ずそれを了へないうちは寝ないこととして勉強した。

竹田は青年時代には非常に字が拙だつた。彼は初めは明清諸家を學び、中頃は東坡に私淑し、後に長崎に遊んで清人江芸閣等と交るに及んで書道益々進み、細勁老道自ら一家を成すに至つたのである。

竹田は常に人に語つて、

「私の手跡は元來非常に拙劣である。只多年法帖に依つて、聊か古意を得たに過ぎない」と言つた。

山陽は嘗て竹田が字を書く處を見て、驚いて「運腕の法が其の妙に達してゐる。吾輩の遠く及ぶ處でない」と言つて、其の後は竹田が字を作る毎に、山陽は容を改めて見物した。

竹田は、茶道に於ても、高遊外、上田秋成の後を受けて斯道の大家と稱せられた。初め千家の門に入り、紹鷗、利休の跡を究め、後に茶經茶疏の説を取つて「泡茶新書」を著はし、製茶、藏茶、擇水、辨器、湯候、冲泡、飲啜、湯滌、得趣等の諸法を説いて、細かに茶訣を開示した。本邦の前茶式は、竹田に依つて啓發せられたものが多かつた。その他茶に關して『葉うらの記』『竹田莊茶説』等の著述をした。或人が竹田の所持した茶入れを手に入れた。袋は粗末な白木綿でつくつてあつて、其の函に竹田の自

筆で、

一文の錢にもならぬこの茶入れわが身のほどにくらべてぞ見ス  
一笑々々、この袋の木綿はわが姉の手作なり  
と、認めてあつた。

文政九年の春、竹田は又もや京都に遊び、其の年の秋、尾道馬關を経て長崎に行き、冬に入つてから家に歸つた。翌十年の春は、熊本を経て、長崎に再遊した。

長崎では、多くの文人墨客と交つた。或は蘭船唐船を見物して、見聞を廣めた。彼が最も利益を得たことは、此の土地で清人江芸閣等と交つたことであつた。

竹田の長崎滞在が餘り永引くので、彼の妻は、定めて夫が金に困つてゐるだらうと思つて年末に一兩の金を工面して、送り届けて遣つた。すると彼は、折ふし周文の繪を一兩一步で賣りに來た者があつたので、妻が送つてよこした金に一步を足して其の繪を買ひ求め、元日にそれを掛けて祝つた。

竹田は一日鳥原の劍雲泉の生れた村を訪ねて見た。其の村へ行つて、村人に尋ねたところが、誰も知つてゐる者はなかつた。漸ら其の屋敷の趾を尋ね當て、あたりに居た農夫に對つて此の屋敷の事を訊いて見ると、矢張り知らないと言つた。竹田は惘然として、低徊して去ることが出来なかつた。

翌年の冬竹田は、長崎を去つて肥州に向つた。途中天草洋を望んで、頼山陽を憶つて一詩を賦した。

天草洋險天下無	東博鳴門不三少輪	崖崩石出急潮怒
盤渦旋起舞三天吾	天吾視人如土直	折橋碎枕笑椰揄
維持十月歲將暮	海氣蕭條雲滿樹	兩肥野曠夕陽沈
路遙村遠少人住	洛陽才子曾過此	手數青錢買舟去

肥後から薩摩に入り、鹿兒島に足を留めて、翌年の春家に歸つた。

文政十二年四月、竹田は高橋草坪を從へて東遊して、大阪に秋の終り迄滞在して、年の暮が近づいてから京都へ行つた。

數年振りで山陽とも逢つた。此の前來た時には、山陽は廣島へ行つてゐて逢ふことが出来なかつた。此の頃山陽は『日本政記』を起稿しつゝあつた。近來、彼は宿痼の肺患の爲めに餘程健康が衰へてゐるやうであつた。併し、元氣だけは毫も衰へなかつた。

其の年は十二月改元されて、天保元年となつた。除夜には、竹田は山陽を訪うて、二人して靜かに歳を守つた。

春、竹田は歸國の途についた。山陽は竹田を送つて伏見に到り、共に大阪迄行つた。

草坪も師に従つて國へ歸つて、竹田莊に寄寓してゐた。五月には、珍しくも鐵翁と逸雲とが相携へて遙々長崎からやつて来て竹田莊を訪れた。」

巨星墮地

天保三年の秋、竹田は中津を経て、馬關に遊んだ。中津、馬關の地には文墨の土が多かつたので、竹田は日々それらの人々と會遊して、日を過した。馬關では、廣江秋水の宅に滞在した。秋水は山陽の門人であつた。

九月二十三日であつた。中津から竹田に隨遊して来た津小石が明日は歸ることになつたので、其の曉は知友が集つて小石の爲めに留別の宴を催した。

其處へ、京都から飛脚が到來した。秋水が出て行つたが、間もなく眞つ蒼な顔をして戻つて来て、たしぬけに、

「山陽先生がおかくれになりました」と言つた。

一座は愕然として、暫く聲を發するものもなかつた。

留別の宴は譬へん方なくしめやかなものになつた。竹田は、小石の爲めに詩を作つた。

留別津小石

故人有計自京師、

恰是君來別我時、

離酒盈腸不爲醉、

強將醒面夜臨岐。

しかし、山陽の死は突然ではなかつた。彼は肺患が重つて、二度までも大咯血をしてゐた。其餘命幾許もあるまい事は誰にも豫知されてゐた。山陽は『日本政記』の稿を急いでゐた。或日、山陽は小石元瑞に來診を求めた上で、

「僕の政記の稿も餘程進んだが、命のあるうちに是非共脱稿させたいと思つてゐる。が、僕の命數は今日以後幾日間保たれるだらうか」と言つて訊いた。

「左様、今日以後三十日の壽命だらう」

と、元瑞は答へた。それは八月十五日のことだつた。

「さうですか、それぢやいそいでやらねばならぬ」

さう言つて山陽は日夜筆を走らせた。九月十五日になつた。政記の稿もほど脱稿に近附かうとした。

そこへ元瑞が來た。

「君はあゝ言つたが、今日で丁度一ヶ月目だが、まだ死なゝいではないか」

と山陽は笑つて言つた。元瑞は首を振つて答へた。

「いや、もう四五日、とても十日とは保たないから仕事は十分にやつて置きたまへ」

山陽は、日夜詰め切つてゐる門人達に、二名宛交替で筆記をさせつゝ稿を續けた。論文八十餘、全篇十六卷、殆ど完成した。

九月二十三日、未刻から山陽は危篤に陥つた。それでも彼は仕事を止めなかつた。暮六つ時に、左右の者を顧みて、

「一寸」と睡りするからな」

と言つて、筆をさしおき、眼鏡を掛けた儘、枕に頭を載せたが、其のまゝ靜かに、永眠したのである。

山陽は五十三歳であつた。

山陽の死は、今更のやうに竹田の胸に悲痛な感を起させた。山陽が歿して半歳経つてから竹田は上京した。京都の土を踏むと、ひとしほ故人を憶ふ心が強くなつた。

山陽歿後八ヶ月経過した或日、竹田は其の家を訪問して山紫水明處に一泊した。

或日竹田は千本街を通つた。其處には一軒の酒店があつた。昔山陽と一緒に其の邊をあるくと、山陽は必ず其の家へはひりこんで、酒を買つて詩を論ずるのだつた。酒店は依然として舊の儘だつた。竹田

は懐舊の情に堪へず、一詩を賦した。

二條城畔路多岐

散步酒看舊酒旗

曾與故人論句處

茶黄麥綠想當時

其の翌年五月木米が死んだ。

竹田は、自分の師友の人々が、一人づゝ缺けて行くのを見ると、自分の齒が一本づゝ脱けて行くやうな氣持がした。故人を悼む心は、やがては自己を傷む心である。彼は、數年前から心掛けて、自分の幼時から今日に至る迄に交つた、多くの師友の人々の小傳を作つてゐたが、それが、天保四年の季になつて『師友畫録』と題して二卷の書に纏め上げられた。それは一百四名の列傳で、我邦の繪畫史上最も重要な著述となつた。

天保五年といふ年も、竹田に取つては非常に不幸な年だつた。其の年の春彼は大阪に行つて、夏西下したが、間もなく伊丹に住んでゐた門人高橋草坪が、病篤しとの通知に接したので、取る物も取り敢へず引き返した。

草坪の病は肺患であつた、齡が若いだけに、病勢が急進して、療養の效も無く、梧桐の葉が落ちるやうに逝つてしまつた。竹田の悲嘆は譬へやうもなかつた。山陽や木米の死はまだしもであるが、若い盛

りの草坪がまだ功を遂げずして、花の散るやうに散つてしまつたことは、どう思ひ返してもあはれで、諦めやうがなかつた。

高橋草坪は、豊後の杵築の生れで、家は商家だつたが、天性畫が好きだつたので、文政五年に竹田が杵築に遊歴した時其の弟子になつた。其の時草坪は十九歳だつた。其の後彼は大概師匠の手許でばかり暮した。竹田が旅行すれば必ず從遊して、殆ど師の側を離れたことはなかつた。彼は天稟の畫才を具へてゐて、山水花卉翎毛人物、悉く善くし、筆墨老成、既に大家を凌ぐ處があつた。先年大阪に行つた時、竹田は草坪を伴つて浦上春琴を訪問した。其の時、竹田が草坪の描いた畫を示すと、春琴はそれを見て、

「是は清の乾隆以上の畫だと思ふ」と云つた。

そこで竹田が、それは今爰へ伴つて來てゐる草坪の筆だと言つたので、春琴は一驚を喫したのでつた。春琴は草坪の將來に囑望して、養子にして自分の後を嗣がせたいと思ひ、其の事を草坪に話したが、草坪は人の後を襲ぐことを屑く思はなかつたので、國許に老母があるのを口實にして、その相談を謝絶した。すると其の後で、篠崎小竹が其の姪を草坪に娶せたいと言つて相談を掛けた。此の方は至極良縁であるので、竹田も賛成して、華燭の典を擧げた。が、草坪は其の時分からすでに病に犯され

てゐたのだつた。

草坪はわづかに三十一歳で死んだ。

其の年、竹田の繪畫論『山中人饒舌』の刻がなつて上梓された。

### 望三郷山一兒未レ到

文政六年の春竹田は東上した。彼は、今年久しぶりに江戸へ行く心組みだつたが、大阪へ着くと、例に依つて長くなつてしまつた。

竹田は豫て大鹽平八郎から依頼されてゐた王陽明の肖像を畫き上げた。その肖像畫は稀なる傑作だつた。畫とは云ひながら、面部の七星がおのづから現はれて、神光人を射るものがあつた。

大鹽は喜んで、それを壁間に掲げ、毎朝香を焚いて禮拜した。大鹽は人に向つて言つた。

「あの肖像の前へ行くと、自然に畏敬の念が起つて、頭が下つて來る。此の己に、畏敬の餘り頭を下させた者は竹田ばかりだらう。吳道元が再生しても、おそらくかうは畫けまい」

六月十三日、竹田は洗心洞を訪ねた。其の日は天滿の祭禮だつた。前日迄の風雨が今朝は名残なく霽れたので、天滿の氏は勇み立つて、巷は何處へ行つても華やかに賑つてゐた。

中齋は欣んで竹田を迎へて、酒を置いて款待した。中齋は非常な元氣で、いろ／＼の談をしたが、輒山陽の事に及ぶと、暗然として眼を曇らせて、山陽が歿年の四月に、病衰の身で大阪へ来て洗心洞を訪ねた時の事などを語つた。

併し、其の夜の歡談は、竹田に取つても近來の快事だつた。談論湧くが如くで、晝の七つ頃から、夜の八つ迄遊んで、大いに酔つて駕に乗つて宿へ歸つた。翌日竹田は其の事を手紙に認めて、國許にゐた太一の處へ送つた。

大阪府外の吹田村といふ處の代官井内右門といふ人は書畫を好んで、豫てから竹田に自分の家へ遊びに来て貰ひたいと云つてゐたので、竹田は七月の十一日に其の家に遊びに行つた。

其の年の暑さは殊の外酷かつた。竹田は、自分が追ひ／＼老境に赴くので、今年のやうに暑さを酷しく感じるのだらうと思つた。併し、吹田村に移つてからは大いに凌ぎよかつた。其の地は大阪城を去ること東へ二里ばかりの處にあつて、田園沃野が東西に擴がり、江口神崎玉江長柄の名所が左右に續いてゐて、村落の風景が大いに彼の眼を娛ませた。

併し彼は、此の春以來故郷からの音信が一回も來ないのでひどくそれを氣にしてゐた。此の前太一に送つた手紙の中にも「毎月一回須し寄書」と書いて遣つたにも關らず、いまだに便りが來ないところを

見ると、太一がそれを讀み落したのだらうか、それとも若い者の常で、遊びにほうけて手紙書く間もないのだらうか……など考へて、獨りで氣をいらつてゐた。同じ田舎と云つても、都會間近の此の吹田村と、自分の故郷の村とは、田野の光景でも風俗人情でも、まるで異つた趣きがあるが、しかし夕陽地に墮ちて、鴉はねぐらに歸り、農夫は小川に鋤を洗ひ、炊煙しきりに地に這つて低迷する頃、殘光を浴びた空を眺めて佇んでゐると、しきりに家郷が戀しく思ひ出されるのだつた。其の戀しい故郷に落ち附くいとまもなく、老來の今日迄東遊西流席の温まる時はなく、放浪を續けてゐる自分の運命を沁々と考へて見たりした。

村中所見

家ごとの蚊遣の煙たちつきにぎはふ村の夕すゞみかな  
といふ歌を、手紙の端へ書き添へて遣つた。

それから數日後のこと、或日彼は茄子の焼いたのを食した。中に、少し生焼のやうなのがあつたが、



好物のことなので何の氣なしに食べてしまった。すると間もなく劇しい腹痛が起つた。今度は前の時よりも一層病氣は劇しかった。

大阪から、篠崎小竹や浦上春琴等が見舞ひに来て、醫者も大阪から招いた。其の病氣もやがて納まつて、日増しに苦痛は薄くなつたが、いつになつても食慾が附かなかつた。體が衰弱してゐた。併し、田舎では療養に不便を感じるので、少し加減のよい日に、竹田は駕に乗せられて、大阪の中の島の藩邸へ送られた。

八月の初めになつてから初めて家信を手にした。竹田は、太一が書いた其の手紙を病床で幾度びも出して見た。彼は寝てゐて筆を取つて、國許への手紙を書いた。

拙事前月中旬より、中暑の處、前症將レ除時、誤喫茄子未熟者、絶無ニ食氣一候、最早生ニ涼氣一時節に相成候、追々快復可レ申候、只今得レ便候ゆへ、此段申遣候、尙追々可申上候。

岡十四日

太一どの

老竹

竹田は、どこまでも自分が死ぬだらうとは思はなかつた。病氣が全快したならば、九月頃から江戸へ發足しようと考へてゐた。

其の手紙を出す間もなく、竹田は俄に重態に陥つた。其の時、彼ははじめて自分の不起を覺つた。

又もや彼は太一に手紙を書いた。今度は筆を執る手が顫へて、字體がしどろに亂れた。

其方上阪日々待居候、此狀參次第、萬事取りすて、直ちに上り可申、小生死に目に逢可申、甚申置事有レ之候、只々早々。

太一へ

竹田

其の手紙は早飛脚で國許へ送られた。

竹田は、太一が来る迄は決して死んではならぬと思つた。太一が来るのが、一日千秋の思ひで待たれた。死に面して、心に懸る事は、吾が兒の上ばかりだつた。

京阪地方にゐた門人達や、知友の人々が、大勢詰め掛けて来て、交るゝ看病した。衰弱はますます加はつた。

秋雨がしとくと降つてゐた。竹田は疲勞の睡りから眼を醒ました。いつの間にか日が暮れて、燈火が枕べを照してゐた。

「太一は、まだ見えませぬか」と竹田は言つた。

「まだお見えになりませんが、もう追つ付け御到着になるのでございませう」と、一人の門人が答へた。石川といふ男で、長州萩の者だが、近年竹田に師事して畫を學んでゐる。

「石川君、筆と紙を取つて呉れ」

「お書きになるのでございますか」

「さうぢや、一絶出来たから書いて置く。半紙では駄目ぢや、半切を」

「畏りました」

石川は、筆と紙を持つて来て、墨を磨つた。

「宜しうございますか」

「大丈夫ぢや。お前紙を持つてゐて呉れ」

竹田は筆を把つて書いた。

八月初八夜 示ニ石川生ニ

同人扶レ病護ニ柴荆一 雨氣帶レ秋吟骨醒ニ 西望ニ郷山一兒未レ到

一つ燈映レ我瘦顔青

満座の人々、泣かぬ者はなかつた。

それほどこがれてゐた太一が漸く到着した。この時太一は二十六歳の若者だつた。

竹田は、吾が兒の顔を見たので安心した。言ひ置く事が甚だ澤山あると云つて遣つたが、逢へば何も

言ふ事はなかつた。

八月二十八日といふ日に、竹田は太一を始め多くの門人知友に護られつゝ、息を引き取つた。

遺骸は南區朽細坂の淨春寺に葬つた。そして郷里の竹田の胡麻生峠には齒と遺髪とを埋め、兩地

に同じ墓石を建てた。碑面は篠崎小竹の筆で「竹田先生墓」と記された。

13979

本朝畫人傳

三〇二

昭和二十三年三月十日發行

本朝畫人傳 第二卷  
定價三百八十圓



著者	村松梢風
發行者	大方眉子
印刷者	大橋芳雄

東京都武藏野市境一四八六番地  
東京都文京區久堅町一〇八番地

發行所

雪月花書房

東京都武藏野市境一四八六番地

共同印刷株式會社印刷

年 月 日

15

9/20/24	8	3	10

閱覽濟

昭和廿參年八月廿日

終

